

人口問題と移民論

——明治日本の不安と欲望——

岡
林
伸
夫

はじめに

一 人口増加と移民

前史／移民論の登場／『時事新報』／志賀重昂『南洋時事』／『国民之友』
／『東京経済雑誌』／恒屋盛服『海外殖民論』／『殖民協会報告』

二 移民の行方

南洋・ハワイ／中南米／台湾・朝鮮・中国／アメリカ
閉ざされる移民

三 拒絶される日本人／「北進」の眼／片山潜『渡米案内』／社会主義者の渡米論
戦争の妄想あるいは予感

四 アメリカの排日問題／日米未来戦記の登場

むすび

はじめに

生半可な知識や中途半端な情報によって（ときにはなんの根拠もなく）妙な思い込みや勘違いをしていることがときどきあるもので、「江戸時代を通じて日本の人口は約三〇〇〇万人前後で停滞していたが、明治維新以後転じて増加してゆく」というのが私にとってはその一つだった。もちろんなぜそうなるのかという理由を私はあやふやながらも述べることができのだが、ここではよりしつかりした根拠として福沢諭吉の文章を挙げておこう。

……封建鎖国の時代には医療は進まず、衛生の法は甚だ不行届にして、現に治す可きの病も治する能はずして、年々非命に斃れたるもの多く、流行伝染病は其蔓延に任せて、曾て予防の法を施したることなし。殊に飢饉の如き惨毒の最も甚だしきものにして、天明度の凶荒に奥羽二州にて餓死したる数は十万人の多きに及びたりと云ふ。其十万人は直接に餓えて死したる者なれども、饑饉の影響として衣食の乏しきを告げ、栄養不足の爲めに病を起して、恰も間接に餓死したる者も必ず多かりしことならん。又云ふも忌はしけれども、従前は彼の墮胎の弊風も頗る行はれて、実際に毒を流したること決して小ならず。

人口の繁殖を妨る原因は一にして足らざりしに、開国維新以来文明の進歩に随ひ、従前不治の病も一匙一刀の勞にして直ちに治し、流行伝染病は予防消毒法の爲めに勢を逞ふするを得ず。時に凶荒の年なきに非ざれども、全国を通じて運輸交通の便あるが爲めに、曾て餓死の沙汰を聞かず。況んや墮胎の如き全く其跡を絶ちて、妨害の原因は殆んど一掃したることなれば、国内の人口増殖せざらんと欲するも得べからず。^(一)

以前にこの文章を読んだ覚えはないのだが、まさに私が思っていたとおりのことが書かれていて、なるほど福沢諭吉がそういつているのだからまちがいがあるはずはない。というわけで「暗く閉ざされ停滞した封建社会の江戸時代、それに対して明るく開かれ進歩する文明開化の明治の世」といった通俗的なイメージが人口問題という視点からも私の中で再確認されるわけである（もつともそんなイメージを作り出した張本人は福沢諭吉その人であろうから、私はめでたくも福沢の掌上で漂っているだけなのである）。

この思い込みは当たっているように見て実状はそんなに単純なものではなく、詳細に検討するとじつはかなりあやしいものようなのである。まず「江戸時代を通じて約三〇〇〇万人前後」というのがはつきり誤りだといってよい。龜頭宏著『人口から読む日本の歴史』という本に拠ると、江戸時代の前期にあたる一六〇〇年代は一五〇〇年代初頭から始まる市場経済化（経済社会化）にもなった人口増加が加速度を増す時期であって、江戸時代に入る一六〇〇年代当初の推計人口は約一二〇〇万から一五〇〇万人程度であったのだという（数値にかなりの幅があるのは、この人口増加の開始時期をどの時点に取るかによってちがってくるからである²）。それが増加を続けて、徳川幕府によって最初に人口調査が行なわれた一七二一（享保六）年には約三二二〇万人強の数値を示すことになる³。つまり江戸時代当初の一〇二〇年間ほどで、二倍強の人口増加をしているのである。

ところが、幕府による次回の人口調査は五年後の一七二六年、以後一八四六（弘化三）年まで六年ごとに行なわれる（子年と午年に行なわれたので「子午改め」といわれる）のだが、問題はこの統計であって一七二一年の約三二二〇万から一八四六年の約三三三〇万まで、数値だけを見ているとほとんど停滞している。つまり市場経済化をともなった人口増加は一七〇〇年代初頭にはピークとなり、少なくとも一七二一年の段階では停滞期を迎えていることになる。ということは江戸時代の人口が約三〇〇〇万で停滞しているというイメージは、幕府の統計が存在する一七二一年以降に限

つては正しいという印象を持つことができるかもしれないが、これも詳細に見ると簡単にそうとはいえない。一七二一年以後停滞から減少に転じた人口は一七九二(寛政四)年には約二九八〇万人になるが、それを底にして増加に転じ、すぐにそれまでの減少分を回復。以後一八四〇年前後のいわゆる天保年間の大飢饉によって一時的な減少はあるものの、基本的には増加を続けて明治維新以後の人口増加につながる^④。つまり人口動態だけからいえば明治維新以後の産業革命(工業社会化)をもなった人口増加期はすでに一八〇〇年代初頭には開始されていた、あるいは少なくともその準備期に入っていたということになるのである。

江戸時代の人口状態がこのようになったのには、中期の停滞に鍵があるという。通常ならばこの停滞はマルサスの人口論が説くところのいわゆる「マルサスの罫」、つまり人口増加が続けば一人あたりに分配される富が減少して総体的な貧困化を招き、人口を増加させるだけの経済力がなくなつて停滞におちいる状態ということになるが、江戸中期の停滞はそうではなく、意図的に予防的措置として出生制限(それが現象としては墮胎や間引きとして表現される)が行なわれることによつて人口増加が抑制され、それによって逆に分配される富を増やしてそれを蓄積し、いわば「余裕」を作り出すことをもたらして一八〇〇年代初頭以後の人口増加を準備した可能性が高いのだ^⑤。となれば、江戸中期の人口停滞そのものが、明治以後の産業革命期における人口増加の準備段階だったともいえることになるだろう。

ともあれふたたび増加期に入つて明治維新を迎え、一八七二(明治五)年の戸籍作成にもなう人口統計では約三三一〇万人という数値を示し(ただしこのときの調査は遺漏が多く、それを修正して約三四八〇万人というのが明治当初の実数とされている)、以後日本の人口は平均すれば年一%を超える増加率をもつて急増して行くことになる^⑥。年一%つてたいしたことないじゃないか、と思つてはならない。約七〇年で二倍になる勘定なのである。

本稿での問題は、そんな江戸から明治へと時代をまたにかけた日本の人口動静自体を分析することでもなければ、そ

の要因を探究することでもない。明治期になって人口急増の事態に直面した言論人たちが、それに対してどのような意識を持ちどのように対処しようとし、メディアを通じてそれを表現することによって近代日本をどんな方向に導こうとしたのか、ということである。それは直接的には「移民論」という形で表現される言論群である。つまりごく単純に言えば、増加する人口が生活できる土地を海外に拡大するために「移民」を奨励するという言論である。

ここで「移民」を定義するならば、「国境を越えた労働者の移動」としておこう。ただし「国境」とは本国と植民地の境界をもふくむ。論者によつては「移民」（たんなる移住）と「植民（殖民）」（農業開墾のための入植）を厳密に区別している場合もあるが、ここでは両者ひっくるめて「移民」として取り扱う。また帰国を前提とした一時的な「出稼ぎ」、労働を第一の目的とせず学資および生活費を稼ぐ必要から働いている無資金の留学なども「移民」にふくめる。というのは現実における日本人の移民はそのような出稼ぎや無資金留学から開始されることが多いし、当初の形態としては定住的な「移民」と区別がつかないからである。

さらにつけ加えておくと、そのような現実の日本人移民が言論人たちの人口急増問題を理由とした「移民論」に動機づけられて移民を決意したかどうかとは別問題である。たしかにそんなものを読んで「そうか、それなら人口問題解決のためにオレが移民になろうか」などと考えたものがまったくいなかっただとはいえないかもしれないが、いたとしてもそれはごく少数で、明治期の日本人移民の大多数は個人的な事情、希望（夢）、欲望によるものといつてよいだろう。たとえば明治政府がハワイ政府との協定にもとづいて行なつたいわゆる「ハワイ官約移民」でさえ、移民当人の動機からみれば個人的な問題であつたことはまちがいない。つまり国策によって強力に推進されたものではないし、増加した人口がそのまま、あるいはかなりの割合で移民となつて国外に出たわけでもない。そういう意味では、彼ら明治期の言論人の「移民論」は人口増加という現実に対して何らの解決策にもならなかつたのである。だからこそ、彼らの「移民

論」がどんな別の現実に結びつくような意識をはからずも作り出すことになるのが重要な問題であるともいえるだろう。

あらかじめ一つ、言いわけめいたお断りしておかなければならないのは、私は明治期の移民や人口に関する言論の総体を網羅的に把握しているわけではないということである。もちろんそれは、関連しそうなすべての新聞雑誌記事や書籍を毎号全冊調査するようなことは物理的に不可能だからである。だから以下の本文中では現在私が把握しているかぎりの資料において論述するということが前提であるということは、ここに明記しておかなければならない。

もう一つ、本稿では福沢諭吉や徳富蘇峰、あるいは片山潜や幸徳秋水といった多数の著作がある論者の移民論を扱う場合があるが、原則として取りあげる論説のみで論じ、他の著作との関連や全著作の中での位置づけのようなことは、必要な場合以外はしない。そんなことは取り扱う移民論でしか正体がわからない他の論者との公平性という問題もあるが、なによりこれもいまの私の手には負えないからである。さらにいえば、既知の論者であろうが未知の論者であろうが、話の流れでなにがしか紹介することはあっても、とりたててその人物について解説を加えることもしない。というわけで、まずはいきなりその「移民論」の噴出状況からである。

一 人口増加と移民

前史

明治維新後の日本は、いったいいつごろから人口増加問題を意識しはじめたのだろうか。西洋の人口理論の紹介はさしおくとして、私が把握しているもつとも早い日本の人口に関する言説は、西村茂樹が一八七五（明治八）年一月に

『洋々社談』第九号に発表した「人口論」である。ここでは日本は「人口の多きこと世界中の第五等」の「人口過多」であるが、それに比較して「ウエルス」(富)が「僅少」であるからそれを増加させるべき政策を政府の手によって押し進めるべきであると論じられていて、人口過多は意識されているが人口増加はまだあまり意識されていないようである。ただそのあとの文中には「今日経済の要は人口の増加を抑へて『ウエルス』の増加を進むるに在り」という言葉が見えるから、まったく増加に対する認識がなかったわけではないだろう。一八七五年といえれば七二年(一月二九日付)に始まった人口統計は以後毎年一月一日付で行なわれ、すでに四年分の数値は知ることができるところから、増加状態の認識はあつたはずだろう。

そのつぎに手元にあるものは、井上哲次郎が一八八二(明治一五)年九月に演説したものの筆記「人口の増殖は懼るるに足らず」(『東洋学芸雑誌』第二二号)である。ここでは「日本」という言葉は少しも使われずに一般的な人口増加を論じている体裁がとられていて、しかもその結論は「社会が開明に進めば」人の「精神を用ふる多く且密」になるのでそれが「子を生むの勢ひ益々減」じさせるから、人口は増加しなくなる、だから「人口の増殖は懼るるに足らず」とはなほ単純で樂觀的だが、すでに日本の人口増加がはっきり意識されていることはまちがいないだろう。

一方、西洋の植民思想の紹介はこれもさしおくとして、具体的に目的地を定めたかたちでの移民・植民論は、早くは政府内部において一八七六(明治九)年に榎本武揚が反乱土族の流刑地としてマリアナ諸島の買収を建議したり、七九年にはその榎本を中心に東京地学協会が設立され、植民調査の意図をもふくめているのか、各地の地理事情の報告がなされはじめたりしている。¹⁰⁾しかし一般的な言論としては、田口卯吉が『東京経済雑誌』が一八八一(明治一四)年あたりから北海道開拓を論じはじめるといように、当初は国内植民問題として語られていた。しかもこれは「土族授産」問題を契機としたものであつて、人口問題を動機としたものではない。海外への移住を論じたものとしては、福沢諭吉

の『時事新報』が一八八四年あたりからとくにアメリカを対象とした海外移住奨励の論説を盛んに掲げはじめた。これについては次節で詳しく述べるが、福沢の「文明論」的観点などを基盤したものであつて、これも人口増加を理由としたものではなかつた。

移民論の登場

もつとも早く人口増加問題が移民の必要性とともに論じられたのは、私が把握するかぎり、一八八七（明治二〇）年一月九日に東京学士会院で講演された杉亨二「我が日本帝国人民の将来を前知するの説と方法」である。

……我が国人は世界の道理に従ふと人の移住の権利あるとによりて、早晚必ず大に移住の運動をなさねばならぬと云ふことあり。其故はと云へば、我が国の人数年々に増加するによるなり。……戸籍の調にて積れば、明治十五年より同十八年まで毎年の出生数より死亡の数を除きたる者並就籍等の増人数を右四箇年に平均すれば、三十六万二千七百七十四人となる。昨明治十九年一月には日本国の総人数は三千八百五万一千二百七十七人なり。大約毎年三十六万人づつ殖ゆると見れば、百六年に足らずして其二倍の人数、七千六百三十万二千四百三十四人の日本国民となるべし。（中略）

……若し人の国内にあり余りたる上は、人力を以て之れを処置することは出来まじければ、人間移住の運動、移住の権利の自然に任せて、外国に出で外国に慣れるやうになること第一なるべし。若し又之れを国内に蟄伏せしめんとせば、今日の我が国の姿なるに、年々人数ふゆるに随て土地は次第に狭くなり、一つの職業をば大勢かかりて共争ひに争ふやうに成て、身に着ることも成りがたく口に喰ふことも叶はぬとて、喰はずには暮らせぬことなれば、終には同志食ひとも倒れと成て、我が日本国の将来も望みなきことならん。¹⁾

ここには人口増加問題を基盤にした移民論が今後共通して見せる構造を、最初にしてもうすでに提示している。すなわち具体的な数値を示して人口増加状況を論じること、人口増加にもなつて貧民が増加する（したがつて基本的にはマルサス人口論を下敷きにして）からその対策として移民が必要なこと、しかし人口増加そのものを抑制する出生制限や結婚制限（マルサスの人口論はむしろこちらに力点がある）の方向には移民論は眼を向けない、という諸点である。

さらに同年二月に出版された周遊散人原著・石田隈治郎編『来れ日本人——一名桑港旅案内』（開新堂）である。この本は『時事新報』の渡米奨励論に乗つたものであり、渡航と在米生活のマニュアル本であるが、

余輩熟々我國の形勢を察するに、人口日月に増殖し、維新前迄は三千万以内に過ぎざりしも今は三千八百万の多きに至り、二十三年国会開設の期には殆んど四千万以上に達せんとするの勢あり。人民多くして土地狭く、為す処の事業は甚だ少なくて、営む所の生計弥々益々困乏に陥るのみならず、恰も方尺に充たざるの田に巨万の種子を落したると一般培養不足を來たして、種子の發育生長甚充分ならざることも亦怪むに足らざるなり。故に余輩は以爲らく、今日の事之を人種改良の説に訴ふるも商法又は國權擴張の人に計るも、兎に角我國の富源を開らき人民の強固を期するには、外国移住を盛にするに若くはなしと。況んや対岸の米國平原曠野、耕すべきの地多く起すべきの業亦少なしとせず。日本不景氣の際に処して生を計るが如き困難あらざるに於てをや。（二〇頁）

というように、人口増加とそれにもなう貧困の増加を渡米移住の論拠にしているのである。原著者の周遊散人はサンフランシスコ在住であるが、その序文には前年一〇月下旬と記されているから、前年後半期にはもはや移民論と人口増加問題が結合する機運が形づくられていたことは確かだろう。それにしても、この一八八七年はそれが続々と表現されることになる。つぎは『時事新報』である。

『時事新報』

『時事新報』の移民論に人口増加問題という動機が登場するのは、同年二月二十八日の社説（無署名）「我士民に海外移住を勧告す」である。少し長くなるが、結末の部分引用しておこう。

……何れの点より見るも、日本国に於て尋常一様の商法に従ひ大に貨殖の道を求めるも、到底得べからざるもの如し。故に我國民中祖先伝来の遺産を承け、鳴かず飛ばずして細く長く生活せんと観念したる輩はイザ知らず、苟も心身屈強にして其働きを違ふし、以て男児の生を遂げんと欲する者は、眼を転じて海外を見ること肝要なるべし。隣国に支那あり、太平洋の彼岸に亜米利加あり、南に赤道を過れば濠洲亦富源に乏しからず。行て耕さんと欲すれば無税の沃土あり。物産を作り出せば其販路に際限なく、商業を営めば信用甚だ広し。即ち尋常一様の商法工業に従事して貨殖の備なるものなり。況や是等の貨殖法は日本人にこそ耳新らしけれども、文明諸国の人民には最も普通の事にして、其成功の事例枚挙に遑あらざるに於てをや。我輩は口を放て、今の天下の士民に向て其海外移住を勧告する者なり。世人或は海外の移住と聞き、皇国の人口が減少するなどて淋しき思を為す者もあらんかなれども、是れは誠に益もなき心配にこそあれ、我大日本国には既に三千七百万の男女ありて、尚ほその上に毎年増加すること五十万に下らず。其群民の一部分を外国に排洩すればとて何ぞ愛しむに足らんや。啻に愛しむに足らざるのみならず、前節に云へる如く小池に衆魚群集すれば相互に其发育を妨るの道理に等しく、今の士民は日本と名くる貧社会に群集して相互に生活を争ひ、又随て相互に妨るものなるが故に、其一部分を外に移せば内に一部分丈の余地を生じて、跡に残る者の生活も稍や寛なるを得べし。外に出る者は外に利を得て内に居る者も亦内の利あり。一挙両ながら利するの海外移住にして、何ぞ之れを愛しむに足らんや。我輩は断じて其利を語る者なり。

ここには、日本人がどんどん移動し、海外に移住して殖産興業すれば経済は発展し、それこそが文明の進歩だという、

『時事新報』が本来持っていた「文明論」的モチーフとともに、それが毎年五〇万人にもなろうとする人口増加に結びつけられた問題意識として表現されている。しかも移民の目的地としてはそれまでアメリカ一本槍の感があったが、中国やオーストラリアにも視野を広げている。このあと『時事新報』にはしばしば人口問題をモチーフとした社説がしばしば掲載されることになるが、同年四月になって移民論の画期をなす書物が出版される。志賀重昂の『南洋時事』（丸善商社書店）である。

志賀重昂『南洋時事』

志賀は前年の二月から一〇ヶ月間にわたり、海軍の練習艦「筑波」に便乗して南洋を視察した。¹³ 訪問した土地は『南洋時事』の叙述にしたがえば、クサイ島（カロリン諸島）、オーストラリア、ニュージーランド、フィジー、サモア、ハワイである。すでに現実には一八八三（明治一六）年からオーストラリアへ日本人の移民が渡りはじめ（木曜島の真珠貝採取労働）、一八八五年にはいわゆる「ハワイ官約移民」が開始されていたから、なにかそのあと追いをしている気がしないでもないが、帰国後彼はこれら南洋の地が日本人移民の好適地だとして『南洋時事』を書き、処女作として出版したのである。その「自序」によると執筆は一八八七年の二月四日に始まり二二日に脱稿。こんなことをわざわざここで記するのは、それなら『時事新報』が人口増加問題を問題意識にした海外移民論の社説を出すよりも書かれたのは早いからである。志賀は『時事新報』紙上に航海中の前年五月から六月にかけて「南洋巡航日記」の連載を送稿、帰国後の一二月には「南洋巡航紀聞」の連載を寄稿し、また二月九日には「日本と濠洲との貿易」が巻頭論説として掲載されているから、すでに同紙との密接なつながりがあって意見の連携を見たか、むしろ『時事新報』のほう志賀の所説を取り入れたのだろう。¹⁴

志賀は札幌農学校の出身であり、ニュージーランドの章ではそれとの比較をふくめて丹念に北海道の開発を検討しているから(一一二〜一二六頁)、ニュージーランドに限らずこの本全体が北海道植民論の延長線上の意識にあることは確かだろう。彼がもつとも日本人にとつて適した地だとするのはハワイであるが、その移民の利益を「(第一) 日本人下等社会が其職業に就くを得ること」、「(第二) 日本下等社会に規律的の労働法を開導すること」、「(第三) 日本国の資本を増殖すること」、「(第四) 日本下等人民に冒險進取の氣象を涵養し、兼て其知識を増殖すること」との四点にまとめてある。とくに第三と第四は『時事新報』の移民論本来の「文明論」的モチーフに通ずるものといえるだろう。そして彼はひとりハワイのみが日本人にとつて適地だということではないとして広く日本人の海外移住を求め、その理由をこう論じている。

……予輩が常に鋭意熱心に我国人の海外移住を奨説するものは、独り布哇のみに限るものに非ざるなり。我同胞の海外到る処に移住遷徙せんことを切望するものなり。顧ふに我日本の人口は歳毎に四拾余万を増殖し、今より五十年を経過せば輒ち二百余万の新蒼生を産出することならん。独り二百余万のみに止らず、人類は猶利息算術の重利法の如くに増殖するを以て、或は二千五百万以上の大数に到るやも知る可らず。即ちこれに今日在来の人口を加ふれば無慮六千式百万ならんとす。是れ五十年後の日本人口なり。然るに日本国土の面積は僅かに式万五千方里に過ぎざる可し。此の藁爾たる海島や、豈に克く六千式百万の蒼生を衣食せしむることを得んや。否、これを衣食せしむるに足る可しと雖も、唯勞々役々として朝三暮四の生計を是れ営むに過ぎざることならん。曷ぞ最大の快樂と幸福とを博することを得んや。之を要するに日本の海島は、最大の民人が最大の幸福を博する能はざるものと断言して可なり。是れ予輩が鋭意熱心に我同胞の海外移住を奨説する所因なり。加之我同胞が海外到る処に移住散在して生業を営み農事に服し、食足り衣厚く漸くにして贏儲の生ずるあれば、其日常任用する処の物品を本邦に

注文し、これが供給を本邦に仰ぎ、兼て本邦と脈絡を通じ、身外国に在るも心内国に在るが如きものに到れば、自他の利益する処蓋し尠少にあらざる可し。(中略)……予輩は兼併主義を懐抱するものに非らず、植民政略を唱道するものに非らず。唯海外到る処に我同胞の移住散在して商業を営み農事に服せんことを奨説するものなり。海外到る処に大和民族が茫然たる温顔を見んことを冀望するものなり。海外到る処に商業的新日本を靚造せんことを希願するものなり。(一九一〜一九四頁)

ここに見られるのは、人口増加問題が将来の予測数値をもまじえながら強い動機としたうえで、彼が述べているとおり政治的・軍事的ではないという意味ではあくまで経済的で平和的な植民開発論であり商業拡大論である。『時事新報』の論調もあいまってか影響力は大きく、二年たった一八八九(明治二二)年になると有力雑誌が次々と志賀と同様な海外移民論を主張するようになる(とはいうものの、すぐに飛びつかずに二年ものブランクがあるのには、なにかワケでもあったのだろうか)。

『国民之友』

まずは『国民之友』である。同誌が人口増加問題にもついた海外移民を論じはじめるのは、一八八九年六月一日(第五二号)の添田寿一(老楽生)「移住を論じ世の志士に質す」という寄稿が最初である。この論文は一八八六年までの人口統計表を挙げながら「本邦の如く邦土は僅々たる一小島にして、然も其人口は今日既に数多なるが上に、……年々増加して止まざる所のものに在ては、……早晚英国の如く、人口の割には国土の不足を感じ可きは、猶ほ火を見るよりも明瞭なり」として国内移住および海外移民を論じたもので、なにがしかの人口統計表を掲げて移民の必要を論じている以後しばしば見かけるスタイルがここではじめて登場する。ただ志賀重昂のものより気になるところは続けて「百

年の後を慮り、今より之れが計画を運し置かざる可らず。即ち他日殖民地を増加するの基礎を養ひ、重きを海軍に置き、海外に航行し之れと交渉することを奨励し」というように「海軍」という軍事的語句が存在することで、志賀よりも政治的・軍事的色彩が忍び寄り寄っている感がある。しかし添田自身はまだ国内移住を重点に置いているようで、もう一つ掲載されている統計表は国内の地域別人口と人口密度であるし、その後七月一二日と二二日(第五六・五七号)に連載される添田の「移民統論」は副題に「北海道」とあって、彼の関心があくまで北海道植民にあることを示している。

つづいて八月一二日と九月二日(第五九・六一号)には、「外国移住民の落付き処」(無署名)の飛び石連載が登場する。これは「日本国は人口の過剰に困めり。已に其多に苦む耳ならず、数十万の人民は年々蕃殖し行くなり。之を救ふの道は我と同様の事情の下に立つ歐洲諸国の例に倣ひ、海外に殖民を企つるに有りと世の已に之を許す処なり。然れども已に此説有りながら未だ之が実行を聞かざるは、蓋し其如何なる国が移住に最も適するやを知らざるが為なり」として、ブラジル、アルゼンチン、ウルグアイと南米事情を記したものである。

そして翌九〇年の六月一三日(第八五号)に強力な論説が現れる。徳富蘇峰の「日本人種の新故郷」⁽¹⁵⁾である。蘇峰は「世界将来の問題を察するに、人種の事最も関心するに堪へたり。今日は最早武力を以て天下を征服するの時に非ず。人種を以て世界を併呑するの時なり」と論じ、その例として「情なき程の小国」である日本と面積も人口もさほど変わらないイギリスが植民地を拡大して「太陽の没すること無」き大帝國を築き、「人種としては大なる者」となっていることばかりか、イギリスなどに「兵力に依りて其領地を削られつつある」中国でさえもが「人種に依りて其領地を拡げつつある」、つまり移民によって世界に勢力を伸ばしているとする。それに比べて日本は植民地もなく、北海道さえ植民政策がうまく行かず、海外移民としては「ただ二万以上に上る布哇出稼人と二三千の間に在る桑港留学生とのみ」であつて、「林々たる四千万人の人口は、只国中に蠢々然として棲息し居るのみ」である。そこで蘇峰は海外移民を奨励

しようというのであるが、その必要性の根拠がやはり人口増加問題なのである。

蘇峰も統計表を掲げて人口増加を論じているが、この手のスタイルをとるものの中ではもつとも多彩な統計表を載せている。まずヨーロッパ各国の本国面積と植民地面積を比較した図表、ヨーロッパ各国の一八〇〇年から八〇年までの人口密度の変動と日本の一八七一年から八八年までの人口密度の変動の表、ヨーロッパ各国のおよそ一八六〇年を境とした（国によって境となる年が若干異なる）それ以前と以後の人口増加率の変動の表、日本の一八八三年以降毎年的人口増加率、ヨーロッパ各国から一八二〇年から八二年までの移民数および七二年から八一年までの移民数（つまり過去六二年間と最近一〇年の数値を比較してその増加を知れということ）とその人口に対する割合、そして日本の一八八五年以降毎年の移民数とその前年よりの増加数である。これらの統計表によって日本の人口増加の実状を強く印象づけたうえで、蘇峰はこう結論する。

説て茲に到れば、吾人の意見は多言を待たずして既に読者に明白なるべし。曰く外国移住は、之を消極的よりすれば、増殖する人口を疏通して其生活を獲せしむべし。之を他方に於ては、我日本人種の勢力を日本帝国外に増加するを得べし。是豈に一挙兩得の計に非ずや。其移住は行く人にも利あるなり。何となれば新しき職業を獲ればなり。留る人にも利あるなり。何となれば之が為に其業に就くべき余地を遺せばなり。其賃銀幾分か騰貴すればなり。（中略）吾人は只須らく国家百年の大策として、我が年々増殖する人口を利用し、之を以て我帝国以外の版図を世界に求め、我邦の根脚を深く政治的経線外に蔓延せしめんことを望まざる可からざるなり。

蘇峰はここで人口増加を理由とした移民を「消極的」と述べ、「他方」ということは積極的の理由を「我日本人種の勢力を日本帝国外に増加する」としているが、そのとおりこれほど統計表を利用して日本の人口増加を論じているにもかかわらず、全体の印象ははるかに膨張主義的色彩が濃いように思われる。彼がこの論説の後半で具体的に述べる

日本人移民の目的地、すなわち「日本人種の新故郷」は志賀重昂と同様に「南洋」であるが（これについては次節で詳述する）、早急になすべきこととして四項目を挙げていて、その第四項が「南洋貿易会社」を設立して南洋との貿易、出店、移住と進めるべきだとしているように、基本的には志賀と同じく商業拡大論である。しかし一方では、第一項では南洋事情の調査を政府の外務省や農商務省に求め、第二項では海軍艦隊を派遣して「操練の利を得る」とともに「日本の国威を輝かす」と述べているように、志賀にはなかった政治的・軍事的な影がつきまといている。蘇峰は翌一八九一年四月二三日の『国民之友』（第一二六号）の「日米同盟」⁽¹⁵⁾において「国家の生存は、人種の生存に依りて決す。人種をして其威力を逞くし、其根脚を堅くし、之をして其四方に蔓延せしむるは、是れ国家の根脚を堅ふする所以に非ず乎」と主張しているが、移民はまさに「国家の生存」のための策なのである。ここには彼の移民論が日清戦争開戦時に『大日本膨脹論』（後述）に拡大していく道筋がすでに示されているといえるのかもしれない。

『東京経済雑誌』

『東京経済雑誌』が人口増加問題を動機とした論説を最初に掲載するのは、一八八九年二月二八日（第五〇二号）である。それは「嗚呼此の遊民を奈何すべきや（続）」と題した無署名の論説で、「……海外移住は独り歐洲諸国の人民のみ計画すべき所にあらず、大和民族たる我が日本人も亦速かに計画せざるべからず。何となれば……我が邦に於ても土地の割合に比して人口大に繁殖し、遂に無職無業の遊民を生じたるを以て、速かに人口を海外に洩さざれば国民一般困難の淵に沈まざる可らさればなり。請ふ左の一表を見よ」としてやはり統計表を掲げる。世界各国の「住民一人に付き面積の割合」という形の人口密度統計である。それによれば（単位はエーカー、・は小数点）密度の高いほうではベルギーの一・三、イギリスの二・二、次いで日本が二・三、ドイツの三・〇、オランダは三・二であり、低いほうでは

オーストラリアの六六六・〇、カナダの四七五・〇、ブラジルが二三二・〇、アメリカは四四・〇などとなっている。これで見るとやはり日本の高密度はきわだっているから、論者たちの不安ももつものことだと思われる（ちなみにのちに参照の必要が生じたときのために記しておけば、中国は八・〇である）。一方でこの論説は過去四年間のヨーロッパ諸国からアメリカへの移民数の統計表も掲載していて、これは日本人もアメリカ移民をということではなく、ヨーロッパ諸国と同じように日本からも活発で多数の移民を各地へ送り出すべきであるという主旨である。そして国内の「遊民」（失業者）のまだ犯罪者にまで墮落していない人たちに移民策を実行することによって「遊民」対策とせよというのである。

このあと『東京経済雑誌』は一八九〇（明治二三）年三月二二日（第五一三号）に鳥居飽田「富国の策を講じて士族社会に望む」を掲載する。これは「武士の気質」はアングロサクソン人に似ているからイギリス人と同様に「殖民と航海」そして「文明的商業」に適しているとして、人口増加に迫られつつある今日の日本において「百九十余万の士族諸君」に移民の任の先陣を切るように勧めるといふ奇妙な論説であるが、問題はその士族に「惜むらくは資本なきの一事のみ」と結論づける。だからそれへの対応策としてつづく三月二九日（第五一四号）において鳥居は「移住論」と題し、先の「嗚呼此の遊民を奈何すべきや（続）」と同じ人口密度統計を掲げて「尤我邦の分には北海道をも含有すれば、もし之を差引かば英国の上に出づべし」とさらに日本の高密度を強調し、くわえて一八八七年まで毎年の人口統計表を載せて日本の人口増加を印象づけたうえで、移民に適した土地として北海道、南洋諸島およびシヤムなどの温暖国、アメリカ大陸の三つを挙げ、民間で移民会社を設立して資金の貸与など移民奨励のための便宜をはかることを提案している（政府の手でそれを実行するのは余分な財政負担がかかるのでダメとしているが、これは財政への配慮というよりも、この雑誌が基調としている政府の保護を排した自由主義経済論によるものだろう）。じつは鳥居はマルサスやミルが説

く人口そのものの抑制、すなわち結婚制限を増加対策の一つに挙げてはいる。しかし「然れども結婚を制するは人情の許さざる所、如何に之を説諭するも寸毫の効果なきを如何せん」とこれを否定したうえで、移民奨励を主張しているのである。

『東京経済雑誌』は先にふれたように以前から「土族授産」問題を契機とした北海道植民論を主張していたから、鳥居のこの論調は土族が移民の先頭に立つことを主張していることからしても、また北海道を第一の移民の候補地にしてることからしても同誌の基調である北海道植民論から脱しきれないくらいがあるが、明らかに眼は海外移民に傾きだしているといえよう。さらに同誌は九月二十七日(第五四〇号)、一〇月一日(第五四二号)、十一月八日(第五四六号)、十一月二十九日(第五四九号)に「本邦人口の実況如何」を連載して、八五年後には二倍になるという将来の予想もふくめた人口増加への危機意識を深め、また十一月八日(第五四六号)と二二日(第五四八号)掲載の越村茂(天涯奇士)「日本植民論」においても「人口増加の困難を防ぐ」ために、および人口増加にともなう貧民の増加によって起こる「内国の争擾」を防止するために移民が必要であり、その最良の地はフィリピンであるとしている¹⁷⁾。というように、ここまでは志賀重昂と同じく人口増加に基盤を置きつつ、基本的には経済的・平和的な商業拡大論であった。

ところが翌九一年三月二十八日(第五六五号)の社説「大に力を海外に伸ぶるの策を行ふべし、商利国防勉めずして成る」になると、最近砲台建設や軍艦建造といった海防力強化論が盛んだが、それを真に充実したものにするために「先づ日本人民が海事航海に慣熟することと、我が同胞を東洋南洋の諸群島に植付くこと」を主張して、移民と海軍拡充を結びつけはじめ、さらに六月六日と一三日(第五七五、五七六号)の越村茂「吾人の取るべき植民政策如何」においては「経済的の殖民は今日或は我国の事情に適せざるの勢」がある、なぜなら経済的理由だけで移民が可能な土地肥沃で人口稀少な土地はすでにヨーロッパ諸国の植民地になってしまっているのではないかととして「政略的の殖民」、すなわ

ち政治的軍事的手段をともなった移民を徳富蘇峰よりも明確に論じ、もはや移民論が軍事問題と単純に結びつく構造を持つものであることを露呈している。しかし『東京経済雑誌』が本来見せていた北海道植民論の基調は根深かったと見え、同年一月二八日（第六〇〇号）掲載の浜田健次郎「植民論」は、人口は増加するほど増加率が鈍るものだから八五年後に二倍の八〇〇〇万などになるわけがない。それよりも「内地の人口の分配を換へ」て少ない地方（つまり北海道）に移せば「もつと人口を殖す余地があるう」と述べて、なかなか海外移民論に徹することができていない。

なお『東京経済雑誌』には田口卯吉の「南洋経略論」（第五一三号、一八九〇年三月二二日）という重要な論説があるが、これについては次節で述べることにする。

恒屋盛服『海外植民論』

ここで恒屋盛服『海外植民論』（博聞社、一八九一年八月）を取りあげる。この本は、例によってヨーロッパ諸国ばかりか日本、中国、朝鮮、シヤムといったアジア諸国や北南米からハワイにいたるまでの各国の面積・人口・人口密度の統計表を、しかも植民地をふくめたもの（日本は人口密度で一位）とそれを省いたもの（日本は北海道を省いて人口密度で二位）の二種類、おまけに四九〇年目の五一億……などというペラボウな数字まで記した将来の日本の人口予測表を掲げ、歴史上の海外雄飛の記憶にも言及しながら日本人の海外移民の必要を主張したもので、単行本だけに詳細に論じられてはいるが、移民論自体としてはここで改めて取りあげるほどのものでもない。ただ次の一文に、これまで検討してきた移民論にははっきり現れていない人口増加に対する複雑な意識をかいま見ることができるのである。

我國民生死の差は、十六年間平均二十三万四千九百四十二人なり。之に出生届漏を加へ概数千分の十とすれば、本年の如きは四十万人を増加すべき割合なり。故に余は年々此四十万人（即増数）をして出でて海外に生活せしめ

んことを期せり。然るときは本国の人口は、経済上の抑制を受くることなくして産業の発達に伴ふを得べく、在外本邦人の人口も其生意の景況に随て増殖し、漸次世界に弥漫するを得べし。幸にして我國民は今日まで大に経済上の抑制を受けたるの跡なしと雖も、若し人口のみ年々増殖して産業更に発達することなくんば、百年の後に至り國民の体格縮小して食糧半額に減ずるか、或は命数大に減縮して出生死亡の差反対の結果を呈するか、又或は生殖力大に減退して人口の繁殖を停止するにあらざれば止まざるなり。勢此の如くなれば、日本の国運は已に衰亡の一方に傾きたるものにして、明君賢相輩出して銳意経綸することあるも、復た挽回すること能はざらんとす。彼の仏国の如きは繁殖力年々減退して底止することなきも、之を前途に救済すべき殖民地の在るあり。独り我国に至ては、未だ之を救済するの途あるを見ず。憂国の士豈に黙視すべきの秋ならんや。(四六―四七頁)

最初の人口増加数を年四〇万人とする計算はよくわからないが、「二十三万」とあるのは「三十二万」の誤植だろう。たしかに一八九〇年前後のころは年間四〇万前後増加している。¹⁹⁾その増加分をそのまま移民にせよとはずいぶん乱暴に見えるが、それほど人口増加に対する危機意識が強かったのだろうか。「若し人口のみ年々増殖して産業更に発達することなくんば」というのも検討すべき言葉で、人口増加対策の一つが移民なら、もう一つは産業の発達、つまり西村茂樹が論じていた「ウェルス」の増大である。ところが産業の発達のためにも移民が必要だという循環論法になるところがあつて、だから志賀重昂にしても徳富蘇峰にしても商業拡大という産業発達論が移民論とセットになつていたのである。

問題はその後で、人口のみ増加すればどうなるかという予想はまさに「マルサスの罠」であり、人口増加は停止し「日本の国運は已に衰亡の一方に傾きたるもの」としているが、ここに私は移民論者の二律背反的な意識を感じる。つまり人口停滞ないし減少が「国運衰退」ならば、逆に人口増加は「国運隆盛」を示しているという意識が彼らにはあるので

はないだろうか。だとすれば、人口増加は彼らにとつてほんとうは喜ばしい事態なのである。人口増加はすなわち国民の元気を示し、元気があるから移民としても活躍できるはずだし、産業も発達し、国運は隆盛するという論理である。そうであればこそ彼ら移民論者の人口増加論は、出生制限による人口調節といった方向にはけつして向かわない。あくまで増加する人口を海外に出して日本人の発展の場を拡大し、それによつて日本の産業の発達を増大させることに意識は向けられるのである。私は人口統計表、とくに人口密度の統計を掲載した移民論を見るたびに、あることを思つてしまふ。そこでの日本はイギリス本国と肩をならべ、その他大多数のヨーロッパ諸国を下に従えているのである。これは論者たちに一種の陶醉状態をもたらしているのではないか。日本はヨーロッパ諸国と、イギリスとでさえ同列、いやそれ以上の国となるべき条件を持つていないのではないか。そのためにもヨーロッパ諸国と同様に多くの移民を送り出し、あるいは同様に多くの植民地を持たなければならない。それなのに「独り我国に至ては未だ之を救済するの途あるを見ず」と恒屋は嘆く。明治の日本が「西洋諸国の植民地にされるのではないか」という危機感によつて支えられていたとはよく聞かれそうなせりふだが、私は恒屋の嘆きには「このままでは日本は一つも植民地を持ってないのではないか」という危機意識があるように感じる。もしそれがその後の日本を支えるものだとしたら……そのとおりの道を日本は歩んだといえるのだが、それはいま論じる場ではない。しかしそんな思いは、恒屋も有力メンバーとして名を連ねた殖民協会の機関誌『殖民協会報告』を見てるとますます強くなる。

『殖民協会報告』

榎本武揚は一八九三（明治二六）年三月、政治家・言論人・実業家らを結集して殖民事業の奨励を目的とした「殖民協会」を設立した。榎本自身が会長になり、評議員の中には志賀重昂、三宅雪嶺、杉浦重剛、島田三郎、柴四朗、井上

角五郎、近衛篤磨、星亨、小村寿太郎、金子堅太郎、肥塚竜らの名が見える（恒屋盛服は設立準備段階の成立委員になっていたが、彼が中心となって組織していた日本移住組合が殖民協會に吸収されたにもかかわらず、評議員にはなっていないようである）。四月には機関誌『殖民協會報告』を創刊し、その第一号に掲載された「殖民協會設立趣意書」には協會設立の動機が五項目にわたって述べられているが、その第一に挙げられているのは、やはり人口増加問題である。

第一 我國の人口は近來非常に繁殖し、我一方里の面積には人口凡一千六百人余を有し、其の増加の割合は毎年凡四十万乃至五十万人なりとす。今より七十余年を経ば我國の人口は八千万人余、即ち二倍の多きに達すべし。我國には北海道其他未開の地あるも、斯の如く多くの人口を容るるの余地なかるべし。假令ひ之れあるも、其限りあるの土地に其限り無き人口繁殖せば、富力の欠乏、貧民の増加、殆んど堪ゆ能はざるに抵らん。北海道の開拓は固より之を努むべきも、未だ之れを以て足れりと為さず、我國の版図に属する地は永く之を失ふの虞なきも、海外に在るの地は速かに之を求むるに非らずんば、尽く他國の有に帰すべし。我國の人口多きに過ぐるを予防するの道は、今日移住殖民の業を盛んにするに在るなり。

二倍になるスピードが少し速くなつたくらいで、あとは取りたてて言うべきことはない。ちなみに第二以下の理由を簡単にまとめると、第二は四方の海という自在な交通を駆使し「平和の手段」をもって海外に移民して「日本人種の繁殖を謀る」、第三は「海軍拡張」と連携して移民や貿易のための航路の確保のために「我邦の海権を收攬する」こと、第四は移民が通商の媒介となって「我國の商権」をおおいに「伸張」させること、第五は長年の「鎖国」で萎縮した「我國の人心を一変すべき開國政略の一大要務」として移民が決定打となることである。ここでは第五のものが目新しく感じられるが、それは私がまだそのことにふれていないだけで、志賀重昂が「冒險進取の氣象を涵養」といつていたのと異口同音であるし、『時事新報』の渡米奨励論はすでにさんざん「鎖国」の弊害を言っているはずだし（おもてだ

ってそんな言葉がなくても、福沢の「文明論」自体がそんな「鎖国」とのイメージの対比を前提にしている)、恒屋盛服も『海外殖民論』で過去の日本人の海外雄飛を論じて「鎖国」を残念がつていた。第一の人口増加問題もふくめて相変わらずだと言いたくなるが、思えば志賀重昂の『南洋時事』からまだ六年しかたっていない。すでに徳富蘇峰の段階で基本的な論点はすべて出つくしている感があるし、それだけ論点としては底の浅いものだともいえる(論点の底が浅いからといって、その結果が単純で人畜無害とは限らない)。いずれにせよこの雑誌の移民論の枢要はこの「設立趣意書」の文章に尽きているし、人口増加と移民の問題が殖民協会というかたちで組織化されたことにながしかの意味があるかもしれないとだけ述べておこう。

『殖民協会報告』は以後具体的に目的地を定めたものや世界各地の移民事情をさまざまに論じることが中心で、総論的な移民論はあまり掲載されないが、一八九九(明治三二)年八月の第六九号から『殖民時報』と改題されて以降は総論的移民論をも盛んに掲載して一九〇二年一月の第一〇〇号まで刊行される。その移民論をつぎつぎと紹介してもこれまでのもと同小異なので退屈であろうから(なにしろこれを書いている私自身がすでに食傷気味である)、ここでは主要な論説のリストのみを掲げておく。

板垣退助「殖民政略」(第三〇号、一八九五年一〇月)

栗原亮一「殖民の急務」(第六九号、一八九九年八月)

島田三郎「海外に於ける日本殖民政策」(第七〇号、同年九月)

管菊太郎「世界の殖民事業と帝国」(第七一号、同年一〇月)

鎌原幸治「殖民の本国に及ぼす利益」(第七三号、同年一二月)

鎌原幸治「世界最終の分割」(第七四号、一九〇〇年一月)

鎌原幸治「殖民放言」(第七八号、同年五月)

鎌原幸治「殖民の動機」(第九八号、一九〇二年八月)

とりあえずはこのくらいで十分であろうが、このなかで一つだけ鎌原幸治の「殖民放言」に少しふれておきたい。鎌原も恒屋盛服と同様、毎年の人口増加分(約五〇万人、と増加数自体が増加している)だけ移民を送り出すべきだと主張するのだが、一八九一年から九七年まで毎年の日本人移民数の統計を掲げて「一年間総計三万人に充ちたことは一回もない」と嘆く(実際の数値は九六年に二万人を超えたくらいで、あとは六千人台から一万三千人台)。このように現実の移民がなかなかうまく行かないというあせりもあるのか、移民に対して「排泄」や「废物」などと聞くに耐えない言葉まで使いながら(だからあまり気持ちのいい文章ではない)こう論じる。

驚くなかれ五十万人。五十万人は吾国の人口より打算して大数ではない。年々五十万人は増殖して行くのであるから、それ丈は云はば剰余である。ありあまつた不用の者である。夫れ故に年々五十万人を海外に排泄しても、少しも国力には影響せぬ。加之のみならず内に在つては夫れに依て人口と食物の平衡を保ち、国家の生存を安固にし、外に対しては是等の五十万人が年々他の邦土に滲入して無形的侵略をなし、通商貿易の媒介となり、何等の代価をも払はず我日本が大々的「パーウアー」となつて世界に雄飛することが出来るのである。即ち废物を利用するのである。ありあまつた不用のものを有用に役だてるのである。国家の生存を危殆ならしむる害物を転じて国運振張の利器に使用するのである。

ここにも先に述べた人口増加が「国運隆盛」だ、あるいは少なくともそのチャンスだという意識がかいま見られる。それを「不用」だ「害物」だというのは、まさに倒錯的心理におちいつているのか、「放言」だからいいと思つていいのか。それなら活字(しかも巻頭論説である)にしないほうがよい。鎌原はこの論説の冒頭でロシアや中国に対する

軍事的膨張論者と「通商貿易を盛んにして富強を致すべしと唱ふる平和論者」を比較しながら、軍事的膨張論は代価が大きすぎると否定する一方で、たんなる通商貿易のみの平和論もダメだとして「殖民は一の代価をも要せず、直ちに人の邦土に滲入して無形的に侵略することが出来る。丁度『バチルス』が肺病患者を殲ほす様な工合にゆける。平和論者の富強策も甚だ妙だが、殖民地の無い通商貿易は決して盛大なる域に進むことは出来ぬ。英国が富強世界に冠たるは世界第一の殖民地所有者であるといふことを見れば分かる」と述べている。こうなればいくら軍事的膨張を否定しようとも、もはやりっぱな植民地主義である。そこには、人口が増えるのだから仕方がないじゃないかというような居直りすら感じさせる。このままだと移民論と軍事的膨張論は境界線があいまいになる危険性をはらんでいるのかもしれない。いや、じつはこの鎌原の文章の時点（一九〇〇年）では、軍事的膨張との垣根はすでに取り払われていたのであるが、それは次節で述べることにしよう。

さて、人口増加問題と移民論の関係の問題はひとまずここで措くとして（いずれまた述べなければならないが）、次は移民論が日本人移民をいっただいどこへ送ろうとしたかという問題である。

二 移民の行方

南洋・ハワイ

移民論に先鞭をつけた志賀重昂の『南洋時事』がすでに典型的に示していたように、移民論がまず想定していた日本人移民の目的地は「南洋」であった。いわゆる「南進論」なのであるが、矢野暢によれば近代日本の「南進」のコースには二つがあつて、第一は沖繩、台湾から中国華南をへてインドシナ、マレー、インドネシアなどへと向かうコース、

第二は小笠原、南洋諸島からフィリピン、オーストラリアなどへ向かうコースであり、明治日本の「南進論」がまず第二のコースをとるのは、第一のコースがすでに植民地支配を確実なものにしているかその触手を伸ばしているイギリス、フランスあるいはオランダといった西欧諸国との政治的・軍事的な勢力争いを招く可能性があるからであり、一方第二のコースだと政治的・軍事的なリスクは少なく、海洋中心の領域で移民・貿易通商あるいは探検といった夢を思い描きやすかったからだという。⁽²⁰⁾ 志賀の場合は第二のコースであり、オーストラリアを通り越してニュージーランドからハワイまで行き着いているが、そうなったのは先に少し述べたようにオーストラリアはイギリス領だが現実には日本人移民がすでに行きはじめているし、ハワイ官約移民はハワイ政府(当時まだ独立国)の強力な要請によるものであるという前提をふまえているからであろう。本質的に政治的軍事的要素を持たない商業拡大論であった志賀の場合は、必然的に政治的軍事的リスクの少ない第二のコースが選択されることになる。

では、現実にはやはり西洋諸国に植民地支配の手を伸ばされつつあった南洋諸島の場合はどうだったのか。そのあたりもふくめて南洋諸島の魅力を典型的に語っているのが、田口卯吉の「南洋経略論」(『東京経済雑誌』第五一三号、一八九〇年三月二二日)である。

余輩熟ら南洋諸島の事情を聞くに、欧洲諸国は夙に之を占領し、其土人を征服し、其の国旗を公示して、以て其所屬たることを宣言せるもの多きが如し。去れば今日にして我邦人の之を占領するは事の最も難きものなりとす。豈に亦た惜しからずや。

然りと雖も欧洲諸国は、事実に於ては未だ十分に之を經營するの準備を為さざるなり。何となれば彼れ実に他の地方に於て為す所多ければなり。去れば南洋諸島は名称上に於ては大約既に欧洲諸国の属国たりと世界に公言せらるること既に久しと雖も、其実に至りては毫も其人民の移住するものなくして、土民は実に其酋長の支配を受くる

ものなり。故に我日本人民にして土地を買入れんと欲するも、殖民を興さんと欲するも、通商貿易を行はんと欲するも、実に自由なり制限する所なきなり。

凡そ赤道直下に位せる土地は大約豊饒にして珍禽奇獸名木宝石に富み、且つ海産物に豊かなることは人の知る所なり。而して余輩の聞く所に因れば、南洋諸島実に然るが如し。彼のハワイに於て我移住民の利を得るを見ずや。南洋諸島は実にハワイに異ならざるなり。而して其土地の所有權未だ定まらざるもの実に多く、既に定まるものも、之を得ること実に容易なり。我四千万の同胞は既に国内に於て遺利なきに苦しめり。我余分の人民を駆りて此豊饒の地に注ぎ、以て南洋経略の地を為す、亦た可ならずや。

余輩は嘗て屢々明言せし如く、我国防には海軍を以て主要となすものなり。而して此の目的を達する方法たる、敢て軍艦の多きを以て足れりとするにあらず。我商業艦隊の増進するを以て永遠なる、堅固なる、且節儉なる国防と思惟するものなり。而して此商業艦隊を増進する方法、豈夫れ南洋諸島の貿易を増進し、之に殖民を興し、以て我日本国と此諸島との交通をして頻繁ならしむるに帰せざるを得んや。故に余輩は我日本同胞の奮起して、志を南洋諸島に伸ぶるに至らんことを希望するに於て殊に切なり。

西洋諸国はまだ南洋諸島をうまく実効支配できていない、いまがチャンスだということ、またハワイ移民がうまく行っていることからの類推で南洋諸島もハワイと同じようなところだということが強調され、志賀と同じく政治的軍事的要素を排した田口の持論である自由主義経済論的な商業拡大論が提唱されている（「海軍」という言葉もあるが、この文章で見ると、まだこの段階では軍事力と貿易を直接に結合させているとは言えず、むしろそれと対抗的に「商業艦隊」の重要性を主張しているもののように思われる）。「遺利」という言葉は今ではあまり使われず聞きなれないものになっているが、明治期の移民や開拓を論じたものにはよく出てくる言葉であり、徳富蘇峰も前節で紹介した「日本人

種の新故郷」のなかで「我邦は旧国なり、遺利殆ど少し」というように使っていて、移民論の発想の基本をよく表現しているだろう。古くから開発しつくされた国内では新たな利益を得ようとしてもそれは限界に達している、それならば遺された利益がそのへんに転がっていたり少し開発すれば容易にそれが得られたりする余裕のある地へ向かおう、というわけで北海道へ、ハワイへ、アメリカへと「遺利」の多い移住の地を求めるといのが移民論者の発想であり、現実に移民する人々が持つ意識でもある。²¹⁾

じつは田口卯吉は、実際に船を用意して南洋貿易に乗り出そうとしていた。ところがこの行動が、ある理由から大問題を起こしていたのである。政府は「武士」という職業を失った士族が実業につくための補助金として「士族授産金」を府県ごとに割り当てていたが、東京府は旧幕臣たちが静岡に移ったりして転籍が激しく、授産金を対象者の頭割りにすることがむずかしかったため、五万円という多額の残金が出た。そこで府知事が府会副議長をも務めていた田口に相談したところ、彼は南洋貿易を試みることを提案してそれで決定したのだが、この話が外部に漏れるや、本来士族に対する補助金のはずの授産金を田口が私物化し私的な利益を得ようとしているとして各方面からゴウゴウたる非難が集中したのである。だから「南洋経略論」はそんな非難に対する弁明、正当化の意味で書かれたということになる。田口はめげずにその金で「南洋商会」という貿易会社を設立して「天祐丸」という帆船を買い、自らそれに乗り込んで一八九〇年五月に船出した。約半年の航海のち帰港した田口は東京地学協会で同年一月に「南洋事情大意」を、翌九一年一月には「南洋貿易及殖民」を報告し、²²⁾とくに後者ではすでに二千人の移住に成功している小笠原と同様に、南洋諸島においても砂糖・珈琲・綿・チコレートの栽培で日本人の移住に成功するだろう述べたが、結局船も会社も士族総代に譲渡して、以後南洋との関係を断ってしまったという。²³⁾してみるとこの田口の試みは結果的に失敗であったのだが、いずれにせよ田口卯吉の名は志賀重昂に次いで日本の南洋関係史に大きな足跡を残したことになるだろう。実際志賀の

『南洋時事』以後日本人の眼が大きく南洋に向けられたことは確かで、南洋を舞台にした政治小説などが続々と書かれ出版されたといふ。²⁴

前節で取りあげた徳富蘇峰の「日本人種の新故郷」（九〇年六月）も、そのとき述べたように南洋をめざす南進論である。彼が具体的に挙げる移民の目的地はまずフィリピン、マーシャル諸島、カロリン諸島であつて「其他、名は欧米諸国の版図なりと雖、其実白人の占領に属せざるもの甚だ多し」と田口と同じような理由を述べるが、「是豈に日本人が他日の新帝国を開くの地に非ずや。苟も日本人種にして此地を占領せば、誰が其来るを拒まん。何となれば是れ所謂空屋無主人の地なればなり」と、どう見ても田口より膨張主義的な言辞である。さらに蘇峰が挙げるのはオーストラリア、タスマニア、ニュージーランドであつて「海南万里真我郷とは、真に是れ斯の荒々漠々の地を指すに非ずや」と論じ、「将来太平洋中の主権を握る者は、その東岸に在る米國に非ざれば、その西岸に在る日本ならん」とまで主張する。つまり太平洋の実権をアメリカと奪い合うことも辞さないというわけである。そのあと彼は田口卯吉の土族授産金問題にふれて、かねてそれに異議を唱えたが「南洋商会」の事業そのものには大賛成だと述べている。

その後人口増加問題を基調にしたものとしては、九一年に服部徹『南洋策——一名南洋貿易及殖民』がフィリピン、南洋諸島への移民を論じ、九二年には稲垣満太郎『南洋長征談』がオーストラリア、南洋諸島への移民を論じている。前者は移民策として「通商貿易」を主張し、「侵食略奪」という軍事的策略を否定しているが、後者になると移民先への航路を確保するために強力な海軍、大艦隊が必要と、軍事との結合を明確に示している。²⁵この時期はかに田口卯吉と航海をもにした鈴木経勲のものなど、南洋関連の書物が続々と出版され、しばし「南洋熱」の状況であつた。

一方、ハワイについては九二年に瀬谷正二『布哇』、九四年に渡辺教行『布哇国案内』、外山義文『日本と布哇』などといった書物が出版されている。このうち渡辺のものは冒頭から日本の人口増加を論じて、もっぱらそれを移民の動機

づけとしているが、瀬谷のものは「布哇は東西の関門なり、南北の咽喉なり。兵戦商戦の上に於て扼るべきの要塞なり、侮る可らざる砲台なり」と述べて、軍事的要素の意図をもふくめている。⁽²⁶⁾しかし『東京経済雑誌』は八九年二月七日(第四九九号)に「布哇国出稼人の景況」と題して、こう述べている。

……今回の帰朝者に就きて調査するに、各々多少の金員を儲蓄し、中には数百円の多きを携帯し来たるものあり。尚ほ他に我が政府への貯金及び時々送金を併算せば、出稼人等が節儉して得たる収益は蓋し尠なからざるべしとなり。抑も衣食を弁したる上に一年七十余円の貨幣を得るは少なからざる収益なり。余輩は全国各地の遊民に向ひ、布哇国出稼を勧告せざるを得ず。

このように主流となる意識は、貯蓄や送金という移民個々人の経済的利益とそれにとまなう国家への経済的利益を基盤においていたようである。官約移民をはじめとしてもはや現実に着々と進行していたハワイへの移民に関しては、それを奨励する意識のほうも南洋に対するものよりもはるかに現実的になつていたということだろうか。

中南米

これも前節で取りあげた恒屋盛服の『海外殖民論』(九一年八月)になると、かなり移民先の対象が広くなる。じつはこの書物の四分の三近くは「後篇」として移民候補各地の事情を記したものであるが、メキシコにはじまって中央アメリカ各地、南米西部(コロンビア、エクアドル、ペルー、チリと太平洋岸のみ)、オーストラリア(大陸のみ)、オセアニア(大陸以外の諸島でタスマニア、ニュージーランド、ニューギニアをふくむ)、マレーシア(マレー半島ではなく、ジャワ、ボルネオ、セレベス、バリ、フィリピンをふくむ)、ポリネシア(マリアナ、カロリン、マーシャルの三諸島すなわち南洋諸島からサモア、フィジー、トンガ、ハワイをふくむ)である。基本的には「南進論」なのだが、

そこに、しかも最初に中南米各地が入ってくるのである。だから、というわけではないが、南洋を太平洋の彼方というようにとらえれば、太平洋の彼方の行きつく先（南米はまさに太平洋側しか取りあげられていない）というわけで、南洋、ハワイの延長線上に中南米があるという意識なのではないだろうか。

中南米がこの恒屋の時点で最初に意識されたわけではない。前節で取りあげたものの中では『国民之友』の「外国移住民の落付き処」が八九年八月の段階でブラジル、アルゼンチン、ウルグアイを扱っていたし、同年二月にはそれまで田口卯吉と同様に土族授産問題の観点から（しかし田口とはちがって保護主義論として）北海道植民を盛んに論じていた若山儀一が、同じ観点から時の外務大臣大隈重信宛の書簡でメキシコ移民を進言していた。⁽²⁷⁾ 中南米移民の構想は南洋について早くから存在していたのである。

榎本武揚もメキシコ移民の構想を持った一人だった。その可能性を探るため、彼は外務大臣在任当時の一八九一（明治二四）年に中南米で初の日本領事館をメキシコに開設して調査を開始。⁽²⁸⁾ 大臣離任後に殖民協会を組織した榎本は、いよいよメキシコ移民を実行に移さんと一八九七（明治三〇）年三月、コーヒー農園開拓を目的とした三六名の移民団をメキシコのチアバス州に送り込むのである（榎本自身が行ったわけではない）。ところが苗の植付け時期を逃すは日本からの資金はとどかないはで、すぐに惨憺たる失敗に終わり、団員たちは離散してしまう。⁽²⁹⁾

その榎本武揚が設立した殖民協会の機関誌『殖民協会報告』であるが、榎本会長の関心を受けついで当初から毎号のようにメキシコ事情を掲載している。その他中米ではグアテマラ、ニカラグア、南米ではアルゼンチン、パラグアイ、ペルー、北米ではカナダ（ブリティッシュ・コロンビア）、アラスカ、アメリカ・ワシントン州、南洋方面ではオーストラリア、フィリピン、マレー、マリアナ、インドといった記事が散見される。もう気づかれていることと思うが、これまで移民論が想定する移民候補地は「南」（さらにその延長としての中南米）には眼を向けても、「北」（朝鮮、満州）

には眼が向けられていない。これはその後の現実の日本の動きを知っているものには、少々不思議に思われるかもしれない。その理由として考えられるのは第一に、南進論が第二のコースを取った理由を応用すると、「北」に移民が向かうとその背後にひかえる中国、ロシアとの政治的・軍事的な要因が表に出てきて、本来経済的・平和的商業拡大論を基盤にしている移民論にとっては不都合なこと。第二に、移民論の前提が人口密度の過密な地から過疎な地へという人間の移動であるかぎり、すでに相應の人口を擁している朝鮮や満州よりもより過疎な地のほうが論理的整合性があり、つまりは「遺利」が大きくて好都合なこと。第三に、これは恒屋盛服が『海外殖民論』(八二頁)で述べていることのだが、日本人にとってはその身体からも食生活からも寒冷地より温熱地のほうが適している(北海道植民がなかなかまく行かないのはそのせいか)ということである。

ところが、一八九五(明治二七)年のなかばをむかえるころから、『殖民協会報告』にはたとえそれがたんなる領事館の事情報告の転載というかたちであれ、台湾、朝鮮、中国遼東・杭州、ひいてはシベリアまでもの記事が掲載されるようになる。そうなった理由はすぐにわかることだろう。

台湾・朝鮮・中国

日清戦争は移民論に大きな転換期を与えた。その典型が徳富蘇峰である。蘇峰は開戦直前から『国民之友』や『国民新聞』に書いた論説を集めて、戦争中の一八九四(明治二七)年二月に『大日本膨脹論』(民友社)を刊行した。その巻頭に置かれた「日本国民の膨脹性」(初出『国民之友』第二二八号、一八九四年六月三日)において彼は移民論を再説する。

蘇峰はまず、ハワイ、サンフランシスコ、朝鮮各地、シベリア沿海州、オーストラリア、シンガポール、香港、バン

クーパーなどですでに居住する日本人の数を数え上げ（なかでも朝鮮への日本漁船の進出を特筆して「現に朝鮮沿海は、事実 に於て我が版図たる也」とまで言う）、それらが日本人の「新故郷」になり、「若し今後四半世紀を経過せば、太平洋の波濤の及ばん限り、南極星の光りの達せん限り、黒潮の暖流の滔々として縈廻せん限り、殆んど我が新故郷を見ざる所なきに到らむ」として、将来を「日本膨脹の時代」だと宣言する。そして日本の人口増加を取りあげ、八五年後までの予想人口表と主要各国の人口密度表を掲げながら、「六十二年目には進て倍数に達し、八十三年目には一億万人と為るべき筈」だから、毎年近江（滋賀県）一國分の面積、六〇年後には面積二倍の国土が必要だととして、「水湧けば溢れ、溢れば流る。人口の運行亦た此の如し。……日本を籠蓋する鉄函を作りて、此の人口の四方に膨脹するを庄迫せんと欲するも、固より能はざる事と知らずや」と述べ、日本の膨脹を必然とするのである。⁽³⁰⁾ところが、この日本の膨脹を妨害するものがある。

但だ我が国民が世界の各所に膨脹するに際し、其の大敵たる可きは白哲人種にあらずして、支那人種たるを忘るる勿れ。支那人種は、或る意味に於ては我が国民同様に、或は我が国民よりもより多く氣候の襲撃を忍受し、其の固有の性格を抱持すると同時に、其の境遇に馴致せらるるの長所を有す。現に今日に於ても、朝鮮に於て、布哇に於て、桑港に於て、浦塩斯德に於て、濠洲に於て、支那人は我が国民の倔強なる好敵手たるにあらずや。サカレン島に於ては、支那人は一尾の鮭すら日本人の漁業者と争ひつつあり。濠洲に於ては、支那人は一箱のマツチすら日本人の売込者と争ひつつあり。

惟ふに我国将来の歴史は、日本国民が世界の各所に新故郷を建設するの膨脹史に相違なかる可く、而して詳説すれば恰も第十七世より第十九世に到る英仏の隣国が、世界の各所に於て膨脹の格闘をなしたる如く、或は日清両国民が、寧ろ兩人種が、世界の各所に於ける膨脹上の衝突史たるも未だ知る可らず。膨脹の衝突史固より可なり。願

くば日勝清敗の衝突史たらしめよ。此の疑案は我が国民の堅信と、大胆と、堅忍不拔の精神とによりて定まるを銘記せよ。⁽³¹⁾

こうして蘇峰は日清の衝突を「膨脹上の衝突史」と位置づけたうえで、つづく論説「好機」(初出『国民新聞』一八九四年七月二三日)では「好機とは何ぞや、言ふ迄もなし、清国と開戦の好機也。別言すれば膨脹的日本が、膨脹的活動をなすの好機也」として、日清開戦を正当化する⁽³²⁾。さあ、現実には戦争が進行すると彼は「戦勝余言」(初出『国民新聞』一八九四年一月二七日〜二月一日)において「旅順口の大勝は、大日本膨脹史の、第一頁に徳書す可き大事実也」と絶叫し、これで清国のみならず朝鮮の死命をも制したとするが、彼がより強調するのは「南方の経営」すなわち「台湾占領」である。

北方に鋭進すると同時に、南方の経営を困却す可らず。南方の経営とは、台湾占領を意味す。

北方を防禦して南方に展開するは、大日本膨脹の大方針也。此の方針たるや、吾人が随意に取り極めたるにあらず。蓋し三百年前の祖先、既にその前例を示したる也。此の前例や、膨脹の自然に適し、膨脹の大勢に順ひ、膨脹の情理に應ずる前例也。

吾人が祖先は、支那の南辺より台湾を突過し、安南、暹羅よりして、呂宋、柬埔寨、ボルネオ、爪哇、その他フキリツフヒン群島よりスマタラの海峡を超へて天竺に渡り、恒河を遡れり。所謂「海南万里真吾郷」とは、三百年前の祖先が歌ひたる実況にあらずや。

彼等は何故に、此の方針に向て新故郷を開拓したる乎。恰も鴻雁が春秋の交に北南に去來する如く、自然の誘導によりて然るのみ。自然の誘導とは、その膨脹に尤も障碍少く、尤も便益多きが為めにあらずして何ぞ。

吾人が台湾を取らんと欲するは、積極的に於ては、大日本膨脹の足場を作らんが為め也。消極的に於ては、他国

をして此の足場を占領せしめざらんが為め也。

それ台湾の地たる、南太平洋の閩門たり。我が九州の大島を隔て、琉球本島、宮古、八重山の諸島と相接して、恰も歩石の如し。

苟も此を以て我が殖民地となし、我が自由港となし、而して我が国防上の要害となす。乃ち英領の香港と相ひ犄角して、雄を競ふに余りあり。此れより南漸してフキリツフヒンに及び、スマタラ海峡に及ぶ。殆んど指顧して定む可し。其の獲物は赫々たる大光なしと雖も、其の実益は決して他の及ぶ所にあらず。旭旗を北京に樹つる、或は一日を猶予すべし。台湾を占領して大日本皇帝陛下の主権内に措くは、決して寸刻も遲疑す可らず。³⁴

蘇峰は中国朝鮮の死命を制したとしながらも、日本人の移民先として中国そのものにはまだ意識が向けられていないようである（「日本国民の膨脹性」で掲げられていた主要国の人口密度表では一平方哩あたり日本の二七五・九に対して中国は二八九となっている。これではさすがの蘇峰でも中国への移民を口には出せなかつたのだろうか。朝鮮への移民についてはすでに現実に進行しているわけだから、さらに論ずる必要を感じなかつたのだろうか。彼はこの時点でやはり南進論である。しかしそれは台湾を「大日本膨脹の足場」としてフィリピンからスマトラ、さらに「三百年前の祖先」と同じくインドシナからシャム、そしてはるか遠くインドまでを視野におさめようとする。つまり南進論の第一のコースがはつきり意識されている。しかもそれは「台湾占領」という日本軍の軍事行動を契機にしたものである。ここで重要な問題は、移民論が当初持っていた政治的軍事的要素を避ける（蘇峰は最初から海軍の威光を背後にするようなあやしさがあつたが）という根底が破られてしまったことである。つまり軍事力を前面に押し出した移民論でもかまわないことになる。人口が増加するのだから仕方がないと、軍事行動の免罪符にすることを認めてしまったのである。『殖民協会報告』が台湾、朝鮮、中国の記事を掲載しだすのは、そうと明言していなくとも意識のうえで日本軍の

行動のあとを追いかけるはじめたからである。のち一九一三(大正二)年に蘇峰は『時務一家言』(民友社)において「北
守南進は、天下の愚論也」と決めつけ、「滿蒙経営」を説いて南進論を放棄するが、それは現実の日本軍の軍事行動が
日清戦争・日露戦争ともつぱら北へ進み展開する道をとったことの正確な反映でしかない。しかもそれはすぐにその翌
年、日本の南洋諸島占領で裏切られてしまうのである。

福沢諭吉も日清戦争後の一八九六(明治二九)年一月に移民論を『時事新報』の社説でふたたび論じた。まず彼は「人
口の繁殖」(一月三日)において一八八五年以降毎年的人口統計表を掲げて日本の人口増加を論じ、つづく「人口の移植」
(二月四日)において「日本人種の繁殖力」は「アングロサクソン人種」に匹敵するが「日本の版図は頗る小にして、
甚だ心細しと雖も、眼を転じて外を眺むれば、未開の天地甚だ広く」として、海外移民を主張するのである。その目的
地として彼が取りあげるのは、まず日清戦争の結果新領地となった台湾であるが、それにつづけてこう述べる。

尚ほ進んで、対岸の支那帝国は人口何億と称すれども、其版図は非常に大にして、内部に未開の土地甚だ少な
らず。又朝鮮とても同様、土地の割合に人口不足して未開の原野広きのみならず、既墾地の荒蕪に帰したるもの
にても幾百万の人口を容る可し。安南、暹羅等、何れも大同小異にして、其他南洋に散在する諸島の如き、或は既に
他の所領に帰したるものもあらん、或は今尚ほ無所属のものもあらんなれども、其所属の如何は人民の移植に差支
なきことなれば、適當の地には続々人を移すべし。

尚ほ遠きに求むれば、南亞米利加なり、亞非利加なり、土地は決して少なからず。近きより次第に遠きに及ぼす
の目的を以て移植の計画を定め、着々実行すべきものなり。³⁷⁾

『時事新報』の移民論は広く日本人の海外移住を説くものになっていたとはいえ、次項で詳述するように本来は人口
増加問題とは関わりなく、アメリカ行きを奨励する渡米論であった。しかし渡米を論じはじめる少し前の一時期に、朝

鮮、中国への移住を説いたことがあった（これも次項で述べる）から、そこにもどっただけと言えるのかもしれないのだが、日清戦後のこの時期に中国、朝鮮への移住を強調するのは、そこに軍事的な言辭がないといえ徳富蘇峰と同じにおいがある。つまり日本軍の軍事行動のあと追いついてきている感がする。福沢が強調していたアメリカがここではまったく現れないことが奇妙で不気味であり、そこにこの福沢の移民論がそれまでの『時事新報』の移民論・渡米論とはまったく異なる印象を与えているというのは、私の偏見だろうか。しかも福沢はここでアンナン（ベトナム）からシヤムという南進の第一コースも南洋諸島という南進の第二コースも視野に入れて、より積極的に海外移住を奨励していることになる。

アメリカ

さて、その福沢論吉の渡米論であるが、それは一八八四（明治一七）年の三月に『時事新報』紙上に突然のように現れる。しかしそれは、福沢が『文明論之概略』（一八七五年）につづく「文明論」の著作『民情一新』（一八七九年）において「交通」が文明の発達にはたす役割を論じたものの延長線上にあるのだとい³⁸う。

福沢は『民情一新』の「緒言」において、「交通」の問題をこう論じる。「西洋諸国の文明開化」の根源的要因は何かといえ、それは「人民交通の便」である。西洋人は何百年と船で世界中を往来し、「其心身を切磋琢磨して、其聞見を広くし、以て活発進取の気風を養成したるの利益」を得てきた。しかも一九世紀になると「蒸気船車」の発明が西洋人の交通をより活発にし、文明を進歩させたのである。

昔年西洋人が、彼の緩漫遅鈍なる帆船を以て、僅に遠方の各地に交通して、尚且人民に活潑の気風を生じて、位を東洋人の右に占めたり。況や今後、この蒸気船車を以て地球の水陸を飛走し、電信、郵便、印刷の利器を以て、

人民の思想を伝達分布することあらば、其勢力の増進、実に測る可からざるものあらん。一新又一新、一変又一変、遂に旧物を廃滅し又変革し尽くすに非ざれば止むことなかる可し。³⁹⁾

福沢はこのような「交通」の観点から、日本人もこれら「文明の利器」を利用してどんどん移動すれば、精神の働きを高めて文明を進歩させることになるとして、海外移住論を主張するようになるのだが、『時事新報』紙上で具体的に目的地をあげて移住といったものが論じられるのは、一八八三年六月五日の社説（無署名）「朝鮮国に資本を移用すれば我を利すること大なり」であつて、朝鮮に日本人が資本を投下して産業の基盤を作れば、日本の文明に大きな利益があることを論じたもの、つづいて同年七月二〇日の社説（無署名）「支那行を奨励すべし」では、中国に移住して商業活動を活発にすれば日本にとって大きな利益（たんに金銭的などという意味ではなく、もちろん文明的な利益ということ）があると論じて、最初はアメリカを目的とした移住論ではなかった。

ところが、福沢が渡米論を唱える条件が整っていくことになる。まずこの年八三年六月、福沢の二子息、一太郎と捨次郎がアメリカ留学に旅立ち、格好の先例ができた。慶応の卒業生はいわゆる「明治一四年の政変」の余波で官界への道をふさがれていたが、かといって松方デフレ政策の影響で不景気風が吹き、民間への就職もままならなかった。しかも同年一二月の徴兵令の改定は、私立学校の学生への徴兵猶予条件を厳しくしたが、外国在留者の猶予は据え置かれた。⁴⁰⁾ それならば学生に海外移住を勧める、といつても通常は出稼ぎ労働であっても農園での苛酷な毎日の労働が待っているし、開拓植民となおさらたいへんで学生にそんな労働能力があるうとも思えない、商業をやるといつても学生に元手があるうはずもない。つまり学生に海外移住を勧めるなら、目的地はアメリカしかないのである。アメリカなら賃金労働の口は豊富にあるし、それで学資を得て大学へ通うという留学が可能である。それを元手にして商業に乗りだしてもよい。つまり福沢の「交通」の観点を学生に応用するならば、行き先は必然的にアメリカになるのである。し

かもアメリカは「文明」の先進国である。「洋行」の印象を与えて学生のプライドを損なうこともなく、そこで暮らした学ぶことはまちがいでなく学生の精神活動を活発化させ、つまり彼ら自身の「文明の進歩」になる。それを日本に持ち帰れば、日本の「文明の進歩」にとって限らない恩恵となるのである。

福沢諭吉の渡米論が『時事新報』の社説としてはじめて登場するのは、一八八四（明治一七）年三月二十五日の「米国は志士の棲処なり」であるが、ここでは二度目の三月三十一日に掲載される「男児志を立てて郷関を出づべし」から紹介しておく。

志士にして若し今の社会の眠を覚まし、人事の繁多なる他の文明諸国に譲らざるものと為すの力あらんか。自から奮ひて文明の嚮導者たることを辞する勿れ。若し尚ほ其力に乏しき掛念もあらんか、更に自から修めて大に其力を養ふの工風を為し、一とたび志を立てて郷関を出て、目下暫らく欧米文明の中心に寄住して、仮りに一身の地位を求め、他年富と知識とを携帯して日本に帰り来り、大に同胞兄弟の爲めにすることあるを期すべし。是我輩が志士の一身のため、又全国社会の公益のため、中心に希望して措く能はざる所なり。

この直後の四月、慶応からは岩崎清吉（清七）や馬場幸之助らが旅立ち、この年だけで十数名が、翌年一月にも前年卒業した武藤山治、和田豊治ら四人が第一回ハワイ官約移民と同じ船で出航するというように、慶応出身者が続々と渡米した。⁽⁴¹⁾慶応出身者ではなくても八四年の秋には蔵原惟郭、内村鑑三、片山潜といつた人たちが渡米している。⁽⁴²⁾このうち片山がかねてからの親友で先に渡米した岩崎清吉からの手紙に「米国は貧書生も学問の出来る国なり」とあるのを見て、その一言で自分も渡米することを決心したという話は、⁽⁴³⁾片山の渡米も福沢の影響下にあったことを示しているが、じつはこの話には前段がある。八三年の夏前ころ（片山の記憶ではそうなっている）岩崎が来年は徴兵検査だし、どうしたものだろうと相談してきたので、どこで聞きかじって知っていたものか片山が「兵士となるよりも渡米して西洋文

明を学び、帰国以つて邦家に尽すの遙かに優れり」として渡米を勧めたのだという。とすることは八三年夏前という片山の記憶が誤っていたとしても、岩崎が渡米を決意する前だから、明らかに福沢が『時事新報』に渡米論の社説を掲載する以前から、渡米という行動がうわさになっていたことはまちがいない。あるいは福沢の二子息の渡米がうわさの出所なのだろうか（それなら岩崎のほうがよく知つていそうなものだ）。明治維新後、いわゆる「四民平等」によつて身分秩序の桎梏から解放され、中村政直訳の『西国立志編』（スマイルズ原著『自助論』などによつて「立身出世」の夢、すなわち「末は博士か大臣か」という社会的地位の上昇という欲望を得ることはできたものの、多くの貧しい青年たちにとつて現実に日本国内でそれを実現する手段はほとんどなかった。慶応の学生でさえこんなありさまだったのである（片山は東京でまともな学校にすら通えず、行けたのは旧式の漢学塾だった）。そんな青年たちに「渡米」という行動は夢の実現手段、自由な自己実現の手段としてすでにうわさになっていたことは十分に想像できる。

ともかくこうして実際に渡米する青年たちが続々出現し、『時事新報』の渡米論も社説ばかりか種々の渡米情報、渡米者からの書簡というように続々掲載されていく。それをいちいち紹介しても、また記事のリストをここに掲げても、この論文ではあまり意味のあることとは思えないので、やめておく⁴⁵。基本的にはこの動きがずっと続いて、前節で述べた一八八七（明治二〇）年二月二八日、人口増加問題の登場になるわけである。また、早くは八五年一〇月に富田源太郎・大和田弥吉編『米国行独案内』一名桑港事情（丸屋）、八六年一〇月には赤峰瀬一郎『米国今不思議』（実学会英学校）八七年になると二月に周遊散人原著・石田隈治郎編『来れ日本人』一名桑港旅案内（開新堂）、五月に福岡照『起業立志之金門』一名米行者必携（日新堂）、九月には武藤山治『米国移住論』（丸善商社書店）というように、渡米奨励ないし渡米の手引き的な出版がなされている。このうち武藤のものは全編の半分ほどがアメリカにおける中国人移民の実情を記していて、彼らの渡米の意識に「中国人にできることが我らにできぬはずはない」と中国人への対抗

という側面を持つことが示されていて興味深い。

ところが、この渡米論には困った問題があった。『時事新報』が熱を上げ青年たちの注目を浴びるほどには、他の新聞雑誌からの評判はあまりよろしくなかったのである。それは渡米者の質にかかわるものとして問題視された。早くも『時事新報』が渡米論を掲載し始めた一八八四年の十一月一三―一四日には『郵便報知新聞』が「外国移住及出稼」という社説を連載してこう批判する。

米国に移住して労役を求むる種族の中には、或は学問研究の志願を抱く者も少なからずと。其志は誠に嘉す可し。果して其素志の如く労役の旁ら螢雪の業を修むるを得ば、誠に可なり。然れども何の思慮もなく徒らに兵賦を避けんとし、若くは目途なき事業を望み、唯身体に資して漫然異域に入り、志業の成らざるのみか、日本貧民の群を異境に現出して、支那人が米人に厭はるる如く国の品位にも関すべきの結果を生ずるが如きあらば、此出稼も亦余輩の賛成すること能はざる所なり。

『東京経済雑誌』も『郵便報知』の社説連載の翌一五日(第二四〇号)に「外国行に狂する勿れ」と題して同趣旨の論説を掲載する。じつはこの時すでに中国人移民はアメリカで排斥され、八二年には新規移民の禁止という事態にたちいたっていた(武藤山治が中国人移民の実情を詳しく書いたのは、中国人への対抗意識であると同時に、中国人移民と同じ運命をたどることのないようにという戒めでもある)。品位のない渡米者の行状には、中国人と同様に日本人排斥を招くのではないかという懸念がつきまとうことになるのである(『時事新報』や志賀重昂が人口増加問題を基盤にした移民論を唱えてから『国民之友』や『東京経済雑誌』がそれに飛びつくまで二年以上ものブランクがあったのには、どうもこのあたりの事情が災いしていたものと思われる)。

これに対して杉亨二は、前節で取りあげた「我が日本帝国人民の将来を前知するの説と方法」(八七年一月)におい

てヨーロッパへ行く場合と比較し、「欧行の方は多くは學術研究にて、官費を仰ぐ者及び富貴の子弟等なり。米行の方は概ね貧書生及び労働者の類にて、自ら立ち自ら業をなし、艱難辛苦、富を求むる人多し。其内には下等の人物もあるべし。言はば玉石混合の雜種人なるべし。去れども国民にして移住の運動を起すに至れば、此事は我が国人のみに限らず、世界万国の免かれざるものなり」と渡米者を擁護し、「日本人民の自意自発の運動」であるからこそ今後「米行」が増加するはずだと述べている。⁽⁴⁶⁾

では、いったい具体的に渡米者のどんな行状が問題視されたのだろうか。ここで尾崎行雄に登場ねがうとしよう。尾崎は大同団結運動に対する弾圧で東京を追放になったのを機に一八八八（明治二一）年一月、欧米視察の旅に出た。サンフランシスコにまず立ち寄った彼は旅先から記者を勤めていた『朝野新聞』に送稿して「欧米漫遊記」を連載、サンフランシスコ在留日本人の実情をつぶさに伝えたのである。じつは尾崎は以前八二年から八五年まで『郵便報知新聞』で論陣を張っていて、同紙が渡米者の実情に批判的な社説を掲載したのは知っていたはず、どころか彼自身が執筆した可能性があるわけで、その情報をサンフランシスコで追認しているだけのフシがある。⁽⁴⁷⁾ それをふまえたうえで尾崎の報告するところを見ることにしよう。彼はまず「米国の西部諸州即ち日本より近き所の太平洋沿岸の地方に在る日本人と、東部諸州に在る日本人とは全く其性質を異にし、東部在留の日本人は何れ実力ある学生にあらずんば富裕なる商人なるに、西部在留の日本人は千中九百九十迄は労役に衣食する無資力の貧生なり」としてサンフランシスコ在留の日本人学生の「劣等」なることを嘆く。「英学の初歩すら修めざる者」がやって来てこんな新開地の程度の低い大学で学ぶからおそろしく「無学」であることに驚くのである。さらにこうつづける。

程度卑低ながらも責めて大学へでも入る者多ければ尚ほ可なれど、無慮二千の出稼兼修學員中大学に在る者は僅々数名に過ぎず、小学に在る者さへ三百名には至らずと聞けり。他の千六七百名は徒らに饑寒に驅られざるに満

足し、料理番ふき掃除の類なる下女仕事を為して揚々得意の色あるが如し。

体格の微弱なる悲しさには日本人は概ね欧米人同様に男子の為すべき労働に服する能はず、之に服すれば久しからず疲衰して疫病を生ず。故に無慮二千の日本人は大抵下女の為すべき台所働き従事し、料理番、ふき掃除等のために雇はれ、通常一ヶ月十四五弗より二三十弗の給金を受けて満足し居れり。……之が為めに日本の品位を落すこと極めて大なり。現に当地にては日本人とさへ云へば上下貴賤の別なく多少輕蔑せられ、料理屋などにも上等の分は日本客の来るを見れば余り善き顔をせざるほどなり。日本人は皆下賤の仕事を為す者と認定し、貴女紳士之と伍することを欲せざるが故なり。(中略)

又人は境遇に因て其思想も変化し、下女仕事を為せば其思想まで下女同様の程度に墮落する者と見え、日本人の多く寄宿し居る福音会などに行て其談話する所を聞けば徹頭徹尾雇主の寛赦、食物の善悪等に過ぎず。恰も日本にて炊婢の井戸側会議を聞くに異ならずと云へり。但し是れは小生を訪問せる諸客の異口同音に小生に語れる所にて、小生は未だ福音会に至て変性女子を實現せざれば確言する能はざれど、決して間違はなかるべしと信ず。他日実見の上誤あれば正すべし。

右の如く根性迄下女同様に成り下りたる人々ゆゑ、当地は働けば幾何にても金の取れる土地柄なるにも拘はらず之を儲蓄して修業する等の考は更になく、一日働ては二三日は寝食ひをする様のみを為し居る様子なり。慨歎の至りと云ふべし。斯る人々にても日本に帰れば洋行帰りと称し、訳もなき事を喋々と稠人広坐の間に説法し、一時多少の愚物を瞞着するなるべし。⁴⁸⁾

ここに描かれた日本人貧乏留學生の典型が、片山潜であつた。岩崎清吉の父親からむしり取るように借金し、その他友人たちから細かく金を借りて行ききの船賃だけ作つた片山はサンフランシスコ港に降り立つが、ABCも知らないまま

だったのではなかなか雇ってくれる家がなく、ようやく見つけたのは週給一ドル五〇セントの「ハウスワーク」だった。⁴⁹⁾ 当時の日本人貧乏学生がつくのは、こういう一般家庭（といってもそういう日本人を雇えるくらいに裕福な中流以上の家庭が普通である）に住み込みで家事労働をする仕事⁵⁰⁾が一般的で、「スクールボーイ」は朝夕だけ炊事（皿洗い）などをして日中は通学することが可能なもの（週給一ドル半以上が標準）、「家内掃除（ハウスワーク）」はフルタイムで清掃・炊事といった家事労働をするもの（月給一〇〜二五ドルが標準）、「料理人（コック）」は料理を中心に家事労働をするもの（月給一五〜五〇ドルが標準、片山ものちにはこれを行った）で、学校の休業中とか修学準備中などにするのである。⁵⁰⁾ 低賃金だがこれらのメリットは住み込み労働だから住居費・食費は不要（雇主持ち）で、もらった賃金がまるまる手元に残り、学資をためることができるのである。そこへいくと多少なりとも旅費と滞在費の準備があつていきなりボストンへ行った蔵原惟郭の場合は、そんな仕事をすることもなく、というよりも東海岸ではそんな家事労働のシステム自体がなかったのである。彼は海産物商店や旅館で働き、のちには演説公演を行なってその入場料で学資を稼ぐという離れわざをやつてのけている。⁵¹⁾ それはたしかに尾崎の言うような東部と西部の差を感じさせる話ではある。

尾崎行雄が「下女仕事」といつているのは、片山がしたような家事労働をさしているのだが、たしかに日本人渡米者の側にも「細君の気嫌気味を伺ふてヒヨコヒヨコ頭を下げることは、日本士族流の男子としては、何となく気恥かしき心地がする」⁵²⁾ というように、好意的に思わなかった人もいた（あいにく片山は士族ではないが）。問題は片山潜在不完全な典型にしかならなかったことである。彼はそこから学資を得て苦学一年、アイオワ大学から大学院、最後はエール大学を卒業して学業を成就したのであつて、多くはそんな家事労働に明け暮れ、金を握れば遊びに明け暮れて、本来の学業から脱落してしまう学生がいた。多くは、などと書いたがそれがどれくらいの割合かは定かではない。そんな統計など存在しないし、うまく成功したのは記録を残して片山のように後世に名を残すが、脱落組は私はこうして失敗

したなどと記録を残すわけでもなく、歴史から消えてしまつたからである。しかし、尾崎が挙げている数字から割合を考へればたいへんなことになる。当時こういう脱落組の、あげくには暗黒的街道に進むような在米者をさして「アメゴロ」(アメリカのゴロツキ、ないしゴロ寝)なる言葉も生まれているくらいなのである。文明の先進国たるアメリカで眼をおおうばかりだと認識された日本人の行状は、そんな言葉を口承させるくらいに文明開化の明治の世にある影を落としたのだらう。このあと尾崎が心配するのは、日本人が中国人と同じように排斥の対象にならないかということである。

斯くて貧生頻りに当国に入込むゆゑ、当国人の日本人に対する感情は日々險悪に赴き、日清両国人の間に存したる距離は日々減少す。今にして早く救回の計を施さずんば、遠からずして支那と同じく拒絶条約締結の侮辱を受け、為めに大に日本国の品位を墜すに至るべし。現に諸新聞紙の如きも日本人に対して無礼の言語を用ゆるの度数次第に増加して、支那人を賤蔑嫌悪するの感情は漸く拡張して黄色人種全体に及ぼんとするに至れり。又公平の観察を下せば、唯だ日本人の方が少しく心術の奇麗なる位にて、其他別に大に異なりたる所なきのみならず、執る所の事業より云へば支那人は許多の資本を卸して盛大なる商売製造等を営み居れど、日本人は皆料理番及び廊下、雪隠、玻璃窓等の掃除人たるに過ぎず、支那人に比して寧ろ下るも上がるることなし。当国人の漸次之を同一視せんとするの形勢あるは無理からぬ事と云ふべし。⁽⁸³⁾

尾崎の心配は、すでに現実のものになりつつあった。つまり日本人移民は、アメリカにおいて中国人移民に対する排斥問題をそのまま引き継ぐことになるからである。この危機感尾崎の報告によってより広まったようであり、『国民之友』も八八年六月一日(第二三三号)に「日本と米国」(無署名)と題して尾崎の報告を引用しながら、中国人と同様に日本人移民に対しても排斥法案がアメリカの議会に出されたりしないか、アメリカ社会で中国人と同じように虐待される日が近いのではないかと不安を述べ、日本の政府と国民にこの問題を看過せぬよう呼びかけている。しかし人口

増加問題を意識してのちの『国民之友』は、九一年四月二三日(第一一六号)に「日米同盟」(無署名、徳富蘇峰)と題して「若し我邦に於て我人口の過多なるを以て困却する本国に齟齬せんよりも、寧ろ其志を伸ばすの余地を求め、米国に向て高飛する者あらば吾人は敢て咎めざるなり」と、渡米を容認している。

また、一八九三(明治二六)年八月に『ヤンキー』(敬業社)というアメリカの大学や労働事情を紹介した本を出版することになる政教社の長沢別天は、九一年一月に自ら渡米してスタンフォード大学に留学し、だから尾崎のような見方には批判的なのだが、それでもサンフランシスコから『亜細亜』に送稿した「北米に赴く者」(第二六号、九一年二月二一日)においては「現時の如き渡航者、乃ち或は年老ひ、或は体弱く、或は風貌甚だ見苦しく、或は片言半語も解すること能はざる者」といった日本人移民に対するアメリカの排斥感情を心配し、さらに同じく「日本人問題」(第四二号、九二年六月六日)においては、日本人労働者が低賃金で働くため中国人ばかりか白人労働者の仕事を奪っていることに対するアメリカ側の反応を気づかっている。

さて、私がここで当初は人口増加問題と関わらなかつたアメリカ移民の問題を長々と論述したのは、じつは明治後半期の移民論が、もっぱらこのアメリカをめざす移民の問題を中心に展開されることになるからである。

三 閉ざされる移民

拒絶される日本人

その一九〇〇年以降、明治後半期の移民論であるが、その前にその言論群が登場する理由としても、どうしても述べておかなければならないことがある。一八九〇年代の末から一九〇〇年代の初め、日本人移民の進路がつつきと閉ざ

されかけようとする事態が生じたのである。

まずは南洋諸島である。ミクロネシアの一部である南洋諸島を構成するマリアナ諸島、カロリン諸島、マーシャル諸島のうち、マリアナとカロリンはスペインがフィリピンの延長として領有を主張し、さらに遠くフィリピンから離れたマーシャルはまだどこにも領有されていない「無主地」とみなされていた。しかしかつての勢力が見る影もなくなったスペインではつけこむスキも多いと思われたのだろう。南洋への移民論のなかにヨーロッパ諸国が実効支配できていないというような意見が見られたのは、このことをさしていると思われる。このスキをねらったのがドイツであった。南のメラネシア方向から侵出してきたドイツとイギリスが一八八五（明治一八）年四月、ミクロネシアの分割協定を結び、カロリン諸島とマーシャル諸島はドイツ領、ギルバート諸島とエリス諸島はイギリス領としたのである。これにもとづいて同年八月にドイツはカロリン諸島を占領したが、当然ながらスペインとの間で紛争になり、ローマ法王が仲裁に入って、ドイツはカロリンがスペイン領であることを認めるかわりに港湾の使用や自由な商業活動の権利を得た。⁵⁴ さらにドイツは同年一月、今度はマーシャル諸島を占領しこれを保護領にしてしまう。一方、一八九八（明治三二）年四月にアメリカはスペインに宣戦布告（米西戦争）、アメリカ勝利のもとに二月には平和条約が結ばれ、スペインはフィリピン、グアム島（ほかにキューバ、プエルトリコも）を放棄して、これらがアメリカ領となった（このうちキューバはアメリカの軍事占領後に独立したが、その後も事実上はなにかばアメリカの植民地状態におかれた。そして九九年六月、アメリカとの戦争で財政が行きづまったスペインは、マリアナとカロリンをドイツに売却する。⁵⁵つまりこれで日本南方の海は、ドイツとアメリカによってふさがれたのである。

つぎはハワイである。一八二〇年代から太平洋に船出して太平洋横断航路（めざすは中国貿易）と捕鯨漁（大乱獲であった）を開拓するため、その絶好の中継基地（当時の船はまだ無寄港で太平洋を横断できず、途中で燃料・食料の補

給が必要であった」としてハワイに目をつけたアメリカ人は大挙そこに乗り込みはじめたが、その時インフルエンザや天然痘などの伝染病が持ち込まれたため、感染死亡によってハワイ人の人口が激減してしまった。ハワイ王国政府が日本政府に熱心に移民を要請したのには、アメリカに国を乗っ取られる危機を感じて、増加するばかりのアメリカ人に對抗可能な人口集団を作りたいという意図があったのである。しかし、いよいよ一八九三（明治二六）年一月にアメリカ軍海兵隊を背後にした白人勢力が政変を起こして王国を廃止、臨時政府が組織され、九四年七月には「ハワイ共和国」の樹立が宣言されたのである。それはもはやアメリカへの併合を前提にしたものでしかなかった。⁵⁶

一方、共和国樹立宣言直前の九四年六月に「官約移民」が終わったあとも、日本人のハワイ移民は民間の移民会社による「契約移民」（あらかじめ労働契約を結んだうえでの渡航で、官約に対して「私約移民」ともいう）、また個人の意志による「自由移民」（しかしこれも移民会社が仲介している場合が多い）というかたちで、もっと盛んにつづくことになる。ところが日本人移民の増加に脅威を感じていた共和国政府は、九七年二月になって移民の条件に適合していないなどという理由でかなりの数の日本人の上陸を拒絶し、強制送還するようになった。その数は四月までで約一〇〇〇人にのぼったという。⁵⁷そして九八年八月、ハワイがアメリカに併合されると、アメリカ本土では八五年から施行されていた契約移民を禁止する「予約労働者移住禁止条例」（これについては後述する）がハワイにも適用されて日本の移民会社は大打撃を受けるが、その後は移民会社が関わるとしても自由移民をよそおうかたちでハワイ移民は継続することになる。⁵⁸ いずれにしても官約移民以来順調に経過してきたはずのハワイへの移民も、アメリカのハワイ併合という事態に振りまわされはじめたのである。なお、一九〇〇年一月にはペストの流行に狼狽したホノルル市衛生局が、消毒と称して東洋人街を焼き払うという事件も起こっている。⁵⁹

そして、そのアメリカである。アメリカが中国をめざして太平洋横断航路を開拓したことは、その結果として中国人

がその航路を利用して西から東へ向けてアメリカに渡ることを可能にした。一八五〇年から開始された中国人移民は、当時まだ端緒についたばかりのアメリカ太平洋岸地域の開発の底辺を担う労働力になっていくのだが、これは陸路をやっとそこにたどり着いた東から西へ向けてやって来るヨーロッパ系労働者と競合することになり、当初から排斥問題が起ることになる。移民排斥の根本的な要因は、底辺における仕事の奪い合いである。中国人移民排斥の先頭に立ったのは、アイルランド系労働者だといわれる。本国の大飢饉によってアメリカに遅れてやって来たアイルランド人移民は、ヨーロッパ系のなかでも支配階級である「WASP」（ホワイト、アングロ・サクソン、プロテスタント）ではないがゆえの抑圧を受け、低賃金労働に甘んじざるをえないことが多かったが、新たにやって来た中国人労働者にもっと低賃金で働かれたのではオレたちの仕事はなくなるではないか、ということである。とくにアイルランド人の女性をはじめた一般家庭での家事労働という仕事を中国人の男性が奪うという競合が起こったこともあって、アイルランド系労働者は自らの「白人」性を証明するためにも、「白人」ならざる中国人移民の排斥に躍起になったのだという⁶¹⁾。移民排斥は（中国人に対する場合に限らず）この仕事の奪い合いを基本構造として、そこに文化・生活程度が劣悪とか道徳観念に乏しいとか同国人で固まりアメリカ社会に同化しないといったものが、人種・民族的偏見をまじえながら、排斥理由としてまとわりつけられてゆくのである⁶²⁾。

当初は単発的・偶発的だった排斥事件も、中国人移民が増加するにしたがって集団化・組織化される。労働組合がその先頭に立ち、排斥同盟ができ、ジャーナリズムが世論をあおり、政治家がヨーロッパ系労働者の票めあてに排斥をアジリ、行政当局が排斥的措置を取るようになる。最後にとどめをさすのは連邦政府である。というわけで一八八〇年、アメリカ連邦政府は中国政府との間に移民取締条約を結び、それにもとづいて八二年に連邦議会は中国人移民禁止法を成立させた（当初は一〇年の期限つきだったが、延長されたあげく一九〇二年に永久禁止になる）。これが「移民の国」

アメリカにおける最初の移民制限措置だった。⁽⁶²⁾しかしこれでアメリカ太平洋沿岸地域の開発の底辺を担う低賃金労働者の需要がなくなったわけではない。それを中国人移民から引きつぎ満たすことになったのが日本人移民なのである。ついでに日本人の貧乏留學生が家事労働をも引きついだのだが（先に紹介した「コック」や「ハウスワーク」というのはそういう事情でなりたつた仕事であり、「スクールボーイ」はその修学生応用版なのである）、そればかりか排斥問題もそっくり中国人移民から引きつぎ、排斥の理由も展開もほぼ同じ経過をたどることになるのである。

連邦政府は引きつぎ一八八五年に契約移民の禁止（予約労働者移住禁止条例）、九一年には貧困者の上陸を制限するため渡航者に一定額以上の所持金の携帯を義務づけ、船会社や雇用者などによる移民勧誘を禁止する（改定外国人移住条例）というようにつぎつぎと移民制限策をとった。契約移民というのは先にふれたようにあらかじめ就労契約（証書・口頭、明諾・黙諾を問わない）を結んだうえでの渡航だが、これが人身売買の温床（行ってみればタコ部屋や売春窟だったというようなことがザラにあった）になっていたこともあつて禁止された。だからアメリカへの移民は自分で渡航して自分の眼で仕事を探すという自由移民が原則なのである。そのため仕事が見つかるまでの生活費が必要になるから、所持金（入管審査のとき見せるだけではないから「見せ金」といわれる）の携帯が義務づけられるわけであり、またいくら自由移民をよそおっても移民会社の仲介によるものは、ほんとうは法令違反ということになる。⁽⁶³⁾こうしてアメリカ側が移民制限策を強めたにもかかわらず、日本人移民は中国人移民が禁止された直後の八四年以降増加し、とくに一八九〇年代の末期に激増して排斥事件も頻発することになった。そこでそれを気づかされた日本政府が一九〇〇（明治三三）年八月、労働目的の旅券（パスポート）発給を原則停止する措置をとった。⁽⁶⁴⁾

当時、旅券発給のためには渡航目的の申請が必要（それは旅券に簡略に記入される）で、これ以後渡米希望者は「労働」がダメなら「留学」とか「商用」とか「観光」を詐称して旅券を得ることになるのだが、これらも審査が厳しくな

つて旅券取得がなかなか困難な事態をむかえるのである。たとえば竹内余所次郎は「渡米者取扱の矛盾」という論説を一九〇六年三月の『渡米雜誌』（第一〇年第三号）に寄稿しているが、そのなかで自身が渡米したとき（〇四年九月）同船者三六人のだれもが労働目的の旅券など持っていないのに入管審査で渡航目的を聞かれると「労働」と答えて入国を許された（入管ではウソはすぐばれる）として、こう述べている（旅券を「免状」と言っている）。

日本では視察研究等の名目で出願し、北米では労働者で関門を通る。ソナナものだと済して居れば居られるかも知れぬが、ウソをつかねばならぬとは情けない次第ではないか。且つ労働で出願して直ちに免状を得らるるならば、今日渡米志願のものはドシドシ渡航出来るけれども、学術研究、商業視察などしつかつめらしき名義を作るは、中々に骨が折れる。夫れ故出願者の十中八九迄はペケを喰つて遺憾骨髓に徹して居る訳であるのだ。

入管で「労働」と答えて通されるのは、労働目的の渡航制限をアメリカ側が行なっているからではない（竹内に言わせればむしろ労働者を歓迎している）からであつて、これはあくまで日本政府側がとっている措置なのである。労働目的以外の旅券発給申請でも「十中八九」却下されるというのはちよつとおおげさなような気がするが、しかしそれに近いかんりの割合で申請が認められない状態になつていたことはたしかだろ⁽⁶⁵⁾う。つまり片山潜のように片道の船賃だけ借金で工面して、サンフランシスコに着けばまた無一文というような渡米は、事実上もはや不可能に近かつた。日本の青年たちに希望を与えていたアメリカへの渡航は、こうして困難さを増しつつあつたのである。

さらに、カナダとオーストラリアである。アメリカと同様に稼ぎ労働者の有力な渡航先になつていたカナダでは、ブリティッシュ・コロンビア州議会が一九〇〇年一〇月、おもに東洋人を対象とした移民制限法を通過させたが、これは翌〇一年九月にカナダ総督が法案成立を拒絶して日本にとってはことなきをえた。一方、一八八三（明治一六）年一〇月からはじまつた木曜島の真珠貝採取労働が継続し、大陸本土へ農園労働の日本人移民もあつたオーストラリアでは、

一九〇一年一月に「オーストラリア連邦」が成立したとたん、七月になつて連邦議會に移民制限法案が提出された。カナダとオーストラリアにおけるこのような事態を受けて同年一月の『殖民時報』（第九〇号）は津田五郎「所謂有色労働者問題の真相如何」を掲載している。

抑も所謂有色労働者排斥問題の因て起る所は、東洋人種の勤勉にして能く過度の労力に堪へ、而かも割合に低廉なる労銀に甘んじ、為めに白色労働者の職業を蚕食して止まざるの点にあるは、今に於て深く論ずるを要せず。唯夫れ労力の需用を制限して、独り国内労力の価格を維持するを以て主眼とす。故に此等移民制限法の真相を穿つときは、其眼中決して白哲人種と有色人種との區別あるべからず。苟くも著しく移民の数を増すときは、歐洲人に対するも將た英人に対するも亦同一の挙に出でざるべからず。而して独り東洋人種に対する排斥の声のみ熾なる所以のものは、不幸にして東洋人種のみ此競争の衝に立て、此に加ふるに其人種を異にし風俗を異にするが故に、偶排斥の勢をして更に大ならしめしに外ならざるなり。

ここには日本人移民排斥を人種問題ではないと思ひたいとの願望が強く出ている。人種問題ならば、實際に人種がちがうかぎり日本人である我々の側に解決する手立てはない。しかし、日本人が勤勉で低賃金でもよく働いて仕事を奪つていくからという労働問題であつて、日本人は嫉妬されているのだと思へば、解決することは可能だというわけである。この理屈は、日本人移民排斥問題に言及する論者にはよく使われる。たしかに排斥問題の根本は仕事の奪ひ合いにあるし、ヨーロッパ系同士の場合でも排斥は起こる。ただ日本人や中国人に対する場合はそれがより強く構造的な差別として表現されるわけで、なぜ「より強く」表現されるのかというところに人種的な要因が絡んでくるのである。

オーストラリアの移民制限法案は、文面だけから見れば日本人、あるいは特定の人種のみを対象にしたものではなかつたが、移住者に英語の試験を受けさせ、これが異常に難解でイギリス人労働者でも不合格になりそうなものであり、

また多額の供託金の提出や筋肉労働者の禁止を盛り込んで、日本人労働者にはまったく突破不可能なものであった。しかし結局この法案も同年一二月に可決成立し、オーストラリアはその後長く続く、いわゆる「白豪主義」政策をとることになる。ただし木曜島の真珠貝採取労働への移住は例外として以後も続く。それは日本人労働者が優秀でよく働き、白人労働者に取り替えがきかなかつたためなのだが、オーストラリア政府は期限を何度も延長したあげく、結局無期限に例外を認めざるをえなかつた。⁽⁶⁶⁾

「北進」の眼

こうして一八九〇年代末期から一九〇〇年代当初に日本人移民の行き先がつつぎと閉ざされようとする事態が起きたとき、日本の言論界において移民論はどう動いたか。一つは「北進」への関心である。南（南洋諸島、フィリピン、オーストラリア）と東（ハワイ、アメリカ、カナダ）への進路が閉ざされようとするならば、残る方角は西と北である。そこにはある大陸しかない。

日清戦後の『殖民協会報告』は、恒屋盛服「朝鮮半島植民の必要」（第五一号、九七年八月）、『殖民時報』と改題してからは、恒屋盛服「朝鮮に於ける日本人」（第七一号、九九年一〇月）、同「朝鮮殖民問題の性質」（第七四号、一九〇〇年一月）、松島宗衛「西伯利及び満洲に於ける日本人」（第八二・八三・八五号、〇〇年一〇月・十一月・〇一年一月）などというように「北」への関心を見せていたが、一九〇二（明治三五）年三月（第九三号）になって、決定的な論説が現れる。南米太郎「支那問題と殖民問題との關係を論ず（支那の開発は以て黄色人種の前提とすべし）」である。南は、日本人移民の進路が閉ざされようとするのは「要するに彼此其膚色を異にするに依らずんばあるべからず」として人種問題だと主張し、このままではいづれ中南米への移民も閉ざされ、いまや五〇〇〇万にもなろうとしてなおも

増加をつづける日本の人口の行き場がなくなり、やむなく「人口増殖の制限」によつて「収縮的国勢を見る」ことになると危機感をつのらせる。だから彼はまず北海道と台湾の開発に力を入れることとともに、移民を進路を変えて継続せよと説くのである。

……即ち従来移民渡航の目的地を換へて尚海外渡航の勢を持續すべし。蓋鬱勃の氣内に充て爆發するや、先づ尤も压力の低き方面に向ふは固より理の当然なり。即ち南に東に我國民の發展地は至る所に重庄に堪へず。只西と北との亞細亞大陸に向て迸發するあらんのみ。清国と韓国と我と人種を同じうし文字を同じうす。而して従来久しく国を鎖して未だ其天富を開發する者なく、今や漸く泰西の風潮に抗する能はずして將に大に革新せんとするに當り、遺利の収むべく事業の興すべき者極めて多し。乃ち米に濠に失ふ所を以て清と韓とに得るもの、天未だ我帝國を棄てざるものと云ふべし。

まさに西と北である。南（ややこしいことに方角ではなく名字である）は中国の将来について、このままヨーロッパ列強の植民地分割競争による争乱が続くことも、あるいは充分に開發が行なわれて商工業ともに日本を圧倒し「独り國運の隆々たる」ことになることも不可と断じ、「其富源の開發と諸工芸技術進化とは能く日本の商工業と衝突せず、永く相合して一大經濟單位を形成して他の列強に対する」道をとるべきだとする。

茲に至つて余輩は信ず、若し東部亞細亞を占めたる黄色人種の大部にして心身真に白哲人種に劣る所なく、等しく文明を促進し科学の応用盛にして能く生産運搬の道を改むることを得べくんば、即ち黄色人種の人口の多きは以て等しく自然の富源を開發するに當りて白人に勝ること言を俟たず。即ち今後の黄白兩種族國間の經濟的戰爭場裡に於て、能く白人帝國を凌駕するに至るべし。

つまり日本人が中国へ移民することを通じて日中兩國の黄色人種連携をはかり、白色人種に対抗凌駕すべきだといふ

のである。もつとも南は、そうすることですぐれ中国が日本を圧倒してしまふという想定もし、そのときは「我國家は蓋能く之に敵すること能はず」と不安を見せるが、そうなたらそうなたでそれはやはり黄色人種の眞の能力を見せることになり、いづれにせよ中国という黄色人種國の開発は日本人という同じ黄色人種の手でなすべきだと主張する。ここには中国に対する欲望と恐怖（警戒）という二律背反的意識が見られるが、どちらにしろ重要なのはこれまでの移民論が、福沢諭吉の渡米論はもちろん文明の發展という「脱亞」的意識を基盤にし、南進論においても基本的には商業擴大という意味で文明の發展という「脱亞」的意識であり、すなわちアジア主義的な意識は見せていなかったのだが、南の中国移民論ははつきりと「興亞」的意識を見せ、日中連携による東アジアの文明發展と欧米への対抗という視点をみせていることである。

中国への欲望は日露戦後となるとますます広がる。岩崎徂堂『最新渡米案内』（大学館）はまだ講和条約調印前の一九〇五（明治三八）年八月の刊行であり、しかもこの本自体は書名からもわかるように、次項以下で詳しく論じる渡米論ブームに乗って出版されたもののだが、副題に「附朝鮮滿洲案内」とあつて実際にそういう付録がついている。岩崎は「緒言」において「朝鮮滿洲も……戦後は一層各事業が勃興するに定まつて居る。何事も機先を制する世の中、一時も早く奮発して行くに限る」と述べているが、その付録の「滿洲の遺利獲得と渡航の急」と題した一節でこう論じる。抑も滿洲は土地が豊饒ではあるが、如何せん人間が少ないために、然かも天然の産物を獲取ることが出来ぬ始末。彼れ暴悪極まる露國は、北清事件後滿洲の地より撤兵すべき義務あるにも拘らず、陽には平和を唱へ、陰に海陸の軍備を増大して、其結果は旅順に軍港を設計し、何時しか滿洲全土を占領して仕舞つた。是等は遂に國際問題となり、偕ては日露の大戦争を見るに至つたが、元來忠実勇武なる我將卒は世界の大強國と誇る彼れ幾十万の露國兵を相手に、戦闘何十回、旅順を始め牛莊、遼陽、奉天、鉄領等あらゆる地を陥落して、今や將さに敵軍を滿洲領

土外に駆逐せんとするの大捷報を吾人同胞に伝へたのは、誠に歓喜極まる話ではないか。

かふなつて見ると現在は勿論の事、将来に於ても実業に志ざす者は一日も早く彼地に涉つて、諸他の経営を試みなければならぬ。否な此時機を利用致して、大利益を獲得すること最も愉快な訳であらう。日本内地の如くに国の小さい割に人民が多く、各人職を求めんに困難して居るとは事違ひ、所謂人力を以て天工を奪はれる道理で、至る所に遺棄埋没してある天産物をば獲得したならば、何の位利益でもあり愉快な訳ではあるまいか。(二一八―二一九頁)

このように満州が日本人移民の進路として大きく意識されることになるが、講和調印前とはいえ、もはや関東州や南満洲鉄道といったロシアの満州權益を引きつぐことは確実になつていたから、やはり日本の軍事行動のあと追いをしているだけのようには思えてしまう。しかもそこには排斥もなく(たとえ抗議の声があつても、蹴散らすだけだ)、日本人は大きな顔をしていられるのである。○六年四月刊の北沢寅之助・成沢金兵衛『新撰渡米案内』(内外出版協会)も同じく渡米論ブームに乗った本だが、「民族勃興の時に際して西漸の新文明的勢力を亨け継いだ日本は、新領土の必要上から二回の大戦争を経て、始めに台湾を獲、今新にサガレンの南半を得、遼東を租借し、韓国に宗主権を立てた。今や東洋経営の舞台は供へられた。意気天を衝く青年は進んで之が経営に従事すべきである」(八頁)として「満韓の経営」を主張している。しかもこれが付録ではなく総論的部分に書かれているのだから、なんだかアメリカも「満韓」も混線的に見さかいかなく移民奨励している感がある。同年四月刊の東郷実『日本植民論』(文武堂)も「……本邦は将来如何なる方面に向つて發展植民すべきか。元來本邦が海外發展の必要を感じる所以は、人口の増加と原料及食料の追求にあるが故に、其植民地は農業的経営に適する必要があることは前述せるが如くなるを以て、将来の發展地は先此目的に向つて適応すべき土地を撰ばざるべからず。而して此目的地として吾人が最適切なりと信ずるは、亜細亞大陸殊に韓国及び

満州の他にあらず」(三六五頁)と述べて、日本人移民の「北進」を強調している。

しかし、中国を日本人移民の進路にすることには、移民論本来の認識から来る疑問が当然あった。○七年六月二五日の『東洋経済新報』(第四一七号)に掲載された植松考昭「日米外交の暗潮(二)」は、中国自体が持つ人口問題の観点からこう論じる。

……今より十年前支那官憲の調査に従へば、支那本部の人口総数は三億八千三百万人と註せられしが、最近の調査に於て其増加して四億七百万人となり。此十年間に於て約二千四百万人を増加したるに徴する時は、毎年の増加率は二百四十万人となるべきに似たり。是等の数字は固より単純なる推測に過ぎずして、到底確算の根拠と為すこと能はずと雖も、要するに亜細亞大陸の最も肥沃なる平野の全面積が、濃密なる人口を以て蔽はれ、且つ其人口が毎年著大の増率を以て増加しつつあるの事實は、之を否認する能はざるなり。

移民論の当初には、人口過密の地域から人口過疎の地域への移動だからこそ、それが正当なものであるという認識があつたはずである。ところが中国がいくら国土が広いとはいへ日本の十倍近い人口を抱え、しかもそれが増加状態にあるとすれば、いまはたとえ顕在化していなくても潜在的には人口増加問題を内在させていることになるではないか。だとすればそんな中国への移民は、たんに中国の人口増加の後始末を押しつけるだけのことではないのか。移民論本来の認識からすれば、この疑問は正論といえるだろう。植松は太平洋の西側(日本、中国)と東側(北米、南米)の人口を対比させ、だから移民という人口移動はあくまで太平洋の西側から東側への移動でなければならぬと論じているのである。

片山潜『渡米案内』

一九〇〇年前後に日本人移民の行き先が方々で閉ざされかけたとき、日本の言論界で起こったもう一つの、しかもはるかに大きな動きは、皮肉にもふたたび移民論の噴出となつて表現された。それは渡航制限によつてよいに国内に逼塞せざるをえなくなりつつあつた青年たちに対して、アメリカの夢とその実現を説く「渡米論」だつた。その口火を切つたのは、自らアメリカでまる一年の苦学生生活を経験した片山潜である。

エール大学神学部での社会問題の研究を最後に渡米生活を終えて、片山は一八九六(明治二九)年一月に帰国した。ところがロクに仕事はなく、やつと得た早稲田の英語講師も半年ほどでクビになつた。そこで「兼ねて研究して来た社会改良事業をやつて見る」⁽⁶⁷⁾ことにし、さいわい援助者も現れ、神田三崎町に家を一軒借りて九七年三月、セツルメントハウス「キングスレー館」を開設したのである。そこは以後片山の自宅として、あるいは労働組合期成会などの司令部として、そしてその機関誌『労働世界』(九七年二月創刊)の編集室として機能することになる。一方、キングスレー館では幼稚園をはじめ青年倶楽部、社会問題講演、日曜講演、大学普及講演、市民夜学校などといった催しを開いたが、英語教授、西洋料理教授などというのもあつた。そういう催しに、片山と同じようにアメリカでの苦学を希望する青年たちが片山に指導助言を求めて集まりはじめたのである。片山は熱心に指導し、講演でも渡米について語り、そのなかから実際に渡米する者がいるとアメリカの知人にあてた紹介状を書いてやつて持たせたりした。そのうち片山は、直接彼に会いに来ることのできない青年たちのためにもと、渡米の指導書を出すことにする。それが一九〇一(明治三四)年八月に刊行された『渡米案内』(労働新聞社)である。そのなかで片山は、今までアメリカへ送り出した青年たちがみなその決心がまちがっていなかったことを彼に報せて熱心に勉学に励んでいるとして、「余は渡米を望むものに対して、特別の事情あるの外は断然渡航すべしと断言せり」と渡米奨励を宣言するのである。⁽⁶⁸⁾

では片山は、いったいなにに根柢を置いて渡米を意味づけようとするのか。もちろん国内で逼塞する青年たちに夢の実現をもたらすことが可能であるというのが第一であることはまちがいないが、もう一つの意味づけはこうである。

若し果して日本国民にして、能くこの島国根性を捨て、文明の真意を解し、其文明的根性を持つて事を作すに至りなば、即ち我日本国は、東洋の一孤島に非ずして、世界万国に拡張することを得べし。否自然世界万国に其国力を増進することを得るに至るや必せり。故に海外に移住若しくは出稼するは、即ち国に忠義を尽すものなり。然り吾人の考えを以てすれば、我日本国民が、国を去つて遠く万里の波濤を犯し、以て他郷に入り、外国に於て一事業を企て、一身の経済を立つると云ふことは、これ国民として最も忠君愛国と云ふべきものたることを信ずるものなり。(四～五頁)

片山の口から「忠君愛国」などという言葉が出てくると驚いてしまう。しかし、ここに表現されているのはナショナルリズムということもあるが、むしろ福沢諭吉が最初に渡米を説きはじめたときと同じような、人間の移動が一身の文明を進歩させ一国の文明を進歩させるという「文明論」的な観点であると見たほうがよいだろう。その意味で片山は福沢の渡米論の正統な後継者である。では人口増加問題はどうかというと、『渡米案内』において人口増加に言及してはいるが、

……日本の人民が如何に増加して五千万人に至るも、決して日本の国が之を養ふ能はざるには非ずして、彼の北海道の如きは今日尚ほ無人の土地多しと云ふ可く、台湾の如きは未だ其農業する発達せりと云ふ可らざるなり。然らば日本人は吾国の未だ開拓せられざるの地を開拓し、至る所に工業を起し、内地の製造を盛大にするを以て急務とせざる可らず。(中略) 我工業を盛にし我富強を計らんと欲せば日本の国が、世界に勢力を得て来る様に努めざるべからず。之をするには決して坐して之叫ぶと云ふ計りに非ずして、一躍日本の国民たるものが世界に出て、即

ち世界へ日本に有る処の物を輸出し、日本の風俗嗜好をも持出し、而して外国人間に之を流行しめなければならん。斯く論じ来れば先づ我人口の多き点よりするも、日本国民が外国へ移住すると云ふことの必要なことは、実に当然たるものと云ふ可きや明かなり。(二一—三頁)

と、台湾をふくめた国内植民と産業発展の必要を前面に出して、移民は産業発展のために必要だということのほうが強く主張されている。その点では翌〇二年三月二〇日の『日本人』(第一五九号)に掲載された「人口増加と労働者」のほうが人口増加問題をはっきり移民の根拠にし、しかも社会主義者片山潜らしい視点を見せている。片山はこう論じる。日本は急激な人口増加をしつつあるが、それによって、農村では小作人の増加によって小作料の騰貴を生じ、そこで生活できなくなった者が都市へ出ると、今度は労働者の増加によって賃金は下落し家賃物価は高騰する。結局人口増加によって、利を得るものは地主と資本家であり、害を被るものは小作人と労働者なのである。政府が自由移民、すなわち移民会社の手によらない独力で移民に対し旅券発行を渋つてこれを制限しようとするのも、人口増加を維持して資本家・地主を利するためである。移民会社は「一地方の愚民、而も奴隸的取扱を甘受する農民」だけを募集するので、「有為の青年」は「依然国内に在りて、資本家地主の餌」とならざるをえない。この状況を「一日も看過」できないから、片山は「渡米」を、そのみならず海外渡航全般を奨励するのである。もつとも彼は、むしろ海外渡航によってすべて人口問題が解決すると考えていたわけではなく、「若夫れ人口増加に対する完全なる策はと問はば、吾人は社会主義を我農工商業に応用すべしと答へんのみ」としている。⁽⁶⁹⁾つまり片山は、人口増加によって労働者や小作者に加えられる抑圧を一つの社会問題ととらえ、そこから労働者・小作者を保護するために渡米をふくめた移民を奨励するのである。

そこへゆくと、『渡米案内』出版直後の〇一年一二月に出されたキリスト教系の社会運動家である島貫兵太夫の『渡米案内大全』(中庸堂)は、タイトルからして明らかに片山の二番煎じなのだが、もつと単純に人口増加問題と移民論

の関係を語っている。

我日本の人口は、近世大西文明の潮流の抵抗してづんづん増加して来て、維新以来一千万余の人口を増したとの事である。何と夥き殖え方ではないか。この有様で見ると、我国民は近世文明の激しき競争に勝ち難き人民ではない。それ程弱き人民ではない。却て此れは興國的の人民である。(中略) 余輩は現今其国民の数の減少しつつある国民を見ては亡国を思へ、増加と見ては興國民たるを思へ来りて、転た感慨に堪へざるものあるを見るのである。

幸にして我國民は非常なる速力を以て増加するの事実を見て、余輩は喜びに堪へぬのである。我國は昔に人口の点に於てのみ増加する事支那人の如くならず、其精神上に於ても進歩發達の力あるを示し、優に大西の文物を消化して己のものとするの力量あるのみならず、之を適用し改造し改良して、其文明を更に大西に輸出するの妙力を有するのである。されば此進歩的興國的の人民は、其氣力と体力との進歩増加するに従つて、旧來占領したる邦土面積にては此の不休の慾望を満足せしむる事能はざるは理の見易き事なるを以て、何れにか其新しき邦土を求めざるべからず。即ち彼等が北はサカレン、浦塩よりサイベリヤ、滿洲、朝鮮、支那、南洋諸島、北米の大陸に到るまで溢れて、潮の如く滔々として諸邦に侵入するに至りたのである。此れ自然の成行きである。人力でない之を拒かんとすれば、自然に背かねばならぬのである。されば我國民をして海外に出づる事を妨げざるのみならず、宜敷適當の方法を案じて之が移住を奨励し、一人も多ク海外万里の波浪を破りて、平和的に領土の拡張をなして、以て其無限の慾望に満足を与へざるべからず。(一一六頁)

この文章をいま改めて読んで、私はびびくりしてしまった。前に述べた移民論者はほんとうは人口増加が「国運隆盛」を示すものだと喜んでゐるのではないかということが、直接的に表現されているからである。ここには福沢諭吉に由来する「文明論」的觀點と徳富蘇峰的な膨張主義がノーテンキに結びついている。だから島貫は、日本人に最適な移

住先が「劣りたる国」ではなくむしろ「優れたる国」でなくてはならないとしてアメリカを主張する。アメリカは「何れの国民も自由に移住し、籍を彼国に有して安全に幸福に、文明国民らしき生活を営み得る所の国である。其天然物の富有なる点に於て、又人民文明の度に於て、吾人は彼の朝鮮国や支那国に勝る事万々なるを信ずるものである。故に吾人は我同胞を富ましめんとせば、米国に移住を企つるに若かざるを認むる者である。其精神上の自由と平等と進歩と剛健とを欲するが故に、吾人は北米合衆国を以て我同胞に最良の移住地たるを認むるものである」(六〇七頁)とするのである。

片山潜の『渡米案内』がベストセラーになり島貫兵太夫がそれにつづいて、以後続々渡米案内書が出版されることになった。それらの多数はたんなる渡米マニュアルやアメリカの大学事情・職業事情などを記しただけのものだが、なかでも石塚猪男蔵『現今渡米案内』(石塚書店、〇三年四月)、奥宮健之『北米移民論』(明義舎、〇三年八月)、相島勘次郎・佐藤政次郎『増補訂正渡米のしるべ』(岡島書店、〇三年九月)などが人口増加と移民を明確に結びつけている。また一般の雑誌においても『東洋経済新報』『成功』『中央公論』『太陽』などが渡米関係の論説記事を盛んに掲載するようになる。こうして片山潜は「渡米熱」といわれるブームを作り出したのである。

『渡米案内』が話題を呼んで、片山のもとにはさらに多くの渡米志願の青年たちが集まるようになった。そこで片山は渡米の指導助言を組織的なものにしようと〇二年四月、「渡米協会」を設立し、例会や演説会など活発な渡米奨励活動を行なう。以後『労働世界』はこの渡米協会の機関誌ともなり、毎号かならず渡米関連の記事を掲載することになる。

社会主義者の渡米論

では、日本人移民の行き先がつきつきと閉ざされかけ、日本政府による旅券の発給が厳しくなりはじめたこの時期に、

なぜこのような移民論の再燃が、それもほとんどアメリカのみに標準を合わせた渡米論として語られることになったのか。しかもその渡米論の大きな一翼を担ったのは片山潜のような社会主義者(あるいは島貫兵太夫のような社会運動家)ということになるのだが、それはなぜなのか。

ごく単純に言えば、行くなといわれたらよけい行きたくなくなる人間の心理ということになるかもしれないが、事態はもっと複雑だった。移民が困難になれば、移民をめぐる社会的環境は悪化する。経営が困難になった移民会社はなんとか利益を上げようとするし、以前から存在していた人身売買常習の悪徳業者はますます移民志願者につけ込もうとするし、旅券取得がむずかしいのならと密航業者が暗躍して暴利をむさぼる。もうまちがいなくこれは社会問題なのである。こんな業者は金のない貧乏な青年を相手にしようがない。しかしその貧乏な青年たちこそ、アメリカに夢を描きながら(アメリカ以外に夢を見ることはできない)、むざむざと国内に逼塞せざるをえないのである。つまり片山が「人口増加と労働者」で述べていたとおりの事態になり、これもまさに社会問題なのである。そんな青年たちを悪徳業者の魔の手から守り、指導助言して渡米の夢を成就させたいからこそ、片山のような社会主義者が渡米論に乗り出す必然があったというのが、ほんとうのところではないだろうか。

のちに一九〇三(明治三六)年の暮れ、テキサスでの米作を試みることになって再渡米した片山潜からキングスレー館も渡米協会も、同年三月から『労働世界』を改題した『社会主義』をも引きついだ山根吾一は、『社会主義』の〇四年一〇月から一二月(第八卷第一二―一四号)にかけて、その名もずばり「移民会社の罪悪」という論説を連載している。これは某移民会社が募集し契約移民としてメキシコの銅山に送り込んだ労働者が、現地でのあまりにも劣悪な労働条件・環境に不安を抱いて逃げ出し、海に飛び込んで泳いでむりやり船に乗って帰国したものの、今度は横浜港で上陸を拒否され、またも海に飛び込んでむりやり上陸したという事件があり、山根はその労働者たちが収容されている横浜

の旅館を訪ねて支援の申し出をしたのだが、その経緯を記したうえで移民会社のやり口を批判する。第一にだれでもたやすく巨利を得られる印象を与えるような甘言による勧誘、第二に実費以上の多額の旅費を取ることにによる暴利、第三に預金制度と称して契約者の所持金を会社に預けさせ投機につき込む行為、第四に旅券を取りあげて契約者の身体を拘束し懲役人同様にする就労、第五に保証人制度によって渡航後の解約を困難にしていること。こういった移民会社の暴利をむさぼるシステムを批判し、さらに山根はこんな移民会社と結託して自由移民に対する旅券発給を抑制し、移民志願者に移民会社と契約せざるをえないようにしている行政当局を非難している。じつは山根には、かつて渡米したとき(二八九〇年九月)の船内で知り合った修学志望の少女と話していたら、彼女が人身売買常習の悪徳業者にだまされていることに気づいたが、助け出す方法がわからなくて青ざめるばかりだったという経験がある。そんな不幸な渡航者をなくすにはどうすればよいのか、志願する者がいるかぎりはずべての人に成就してもらいたい。渡米できたとしても、アメゴロ的誘惑に負けないで初志を貫徹させてもらいたい。アメリカでの自由な自己実現を完成してもらいたい。山根にしる片山にしる社会主義者の渡米論には、たとえ直接的には語られなくとも、根底にはそのような問題意識があったと私は考えている。²⁰⁾

ともかく『労働世界』とそれを改題した『社会主義』の片山潜のまわりには、山根吾一、松崎源吉、野上啓之助、原霞外らといった社会主義者の渡米論者があり、他誌から寄稿した人では植松考昭(東洋経済新報主幹)がいたし、洪田市郎、菊池立元、児玉星人、中沢二郎らというように実際に渡米する人がいた。²¹⁾このうち松崎、野上、植松には人口増加問題を中心とした渡米論の論説もある(松崎源吉「吾人は何故に渡米を奨励する乎」、『社会主義』第七年第一七号、一九〇三年八月三日。野上啓之助「殖民論」、『六合雜誌』第二七四号、一九〇三年一〇月一五日。植松考昭「海外移住論」、『社会主義』第七年第二三・二五号、一九〇三年一月三日、一二月三日)。『社会主義』の編集が山根吾一の手

移つてからは誌面に飛躍的に渡米関連の論説記事が多くなり、社会主義者ではない執筆者も盛んに起用されるようになるが、社会主義者も社会主義者ではない人も（あるいはその時点では不明の人も）ひっくり回して、のちに『北米の新日本』（博文館、○五年九月）という著作がある安部磯雄や大石誠之助、奥宮健之、加藤時次郎、竹内余所次郎、蔵原惟郭、牧口常三郎、野口米次郎らが登場した。これらのなかには人口増加問題にふれているものもないわけではないが、基本的には青年の夢とその実現を語つたもの、あるいは実際の渡航事情やアメリカ事情を語つたもので、その意味では人口問題にほとんど関心が見られない山根の意向をはからずも反映しているといえるのかもしれない。

こうして『社会主義』はさまざまな渡米論者・渡米経験者の論壇となつた。そのため山根吾一は、○四年一二月（第八年第一四号）に中里介山の寄稿「戦争と宗教家」によつて当局から発売停止と発行編集人である山根自身の起訴という弾圧を受けたのを機会に、○五（明治三八）年一月から『渡米雑誌』と改題して渡米・移民情報専門誌化をはかつて社会主義色を払拭し、かつては幸徳秋水と堺利彦の平民社結成（○三年一〇月）に三人目の男として加わつた山根自身も、同年八月に山路愛山らと「国家社会党」を結成して社会主義運動の本流からはずれた。さらに○七年一月からは『亜米利加』と再改題して内容を充実させていったが、そこにはもはや移民の根本的問題はそちのけで、青年に海外渡航の夢とその実現を説き、旅券取得から渡航手続きといった渡米マニュアル、アメリカの大学事情、職業事情、生活情報、アメリカやハワイでの成功譚、経験談、そして渡米のみならず全般的な移民関連資料などばかりが満載されることになつてゐるのである。⁽²⁾

このような渡米論は、表面的にはもっぱら青年たちの夢をたきつけるだけものにはしか見えないから、批判は当然あつた。渡米しても修学や成功の夢を成就できず、あげくにはアメゴロ的墮落に転じる多くの失敗の事例を隠蔽してゐるのではないか、という批判である。その代表例が、在米事業家である井上啓二郎が一九〇六年九月と一〇月に『新公論』（第

二二巻第九、一〇号)に寄稿連載した「米國に来る勿れ——故國青年の渡米熱を排す」である。井上は片山や山根たちを名指して批判する。

我は先づ片山潜君、安部磯雄君、島貫兵太夫君、山根吾一君、其他故國に在て頻りに青年男女の渡米熱を鼓吹せらるる諸君を責む。諸君が米國光明の一面のみを説いて、暗黒の方面を説かざる結果、毎月幾百幾千の青年を失望せしめ、墮落せしめ、其一生を誤ちつつあり。一身の方向を誤るのみならず、同胞の体面を汚がし、故國の面目を汚し、直接間接故國大日本の真正なる發展に悪化を及ぼしつつあり。我は茲に在米國十萬の同胞に代りて彼等の無責任を責め、併せて故國青年諸君の注意を乞はんとす。

井上が「渡米熱煽動家の罪」として弾劾するのは、次の四点である。第一に、カリフォルニアは人間の品性を作る地ではないということ。つまりスクールボーイやハウスワークとは、しよせんヨーロッパからの流れ者の家で働き、金のために「唯々諾々の奴隸的態度と奴隸的言語」が身につけてしまうものであり、あげくに多くがアメゴロとなつて品性を失う。第二に、日本人にとってアメリカは制裁のない地であること。つまり誘惑に負け墮落しがちな青年を戒めてくれる家族も教師も隣人もいない。第三にアメリカにおける成功は眞の成功者であることを意味しないこと。つまりアメリカでの成功とは金もつけができたというだけのこと、眞の人間としての成功とはいえない。第四にカリフォルニアの文化は日本よりもはるかに劣るということ。つまりカリフォルニアは新興地で文化的に進んではおらず、そんなところの大學を卒業して帰國したところでホテルの通訳になるくらいが関の山である。これらはすべて、まさに尾崎行雄以來の批判的な視点が継承されているとすべきだろうし、要するに一言でいえば、渡米という行為の有効性に対する懷疑である。ただし、井上は「着実なる移住民を歓迎す」すなわち「相當の資本と伎倆を具へて米國の土となるを覚悟し、家を携へ来る者」に対しては「吾人の衷心より歓迎する」と結んで、若者の無謀な渡米ではなく、眞の意味での移住を

求めている。

片山潜と安部磯雄という御大二人を前にして社会主義者が全員渡米奨励派だったかといえは、まったくそんなことはない。たしかに二人がいるから悪口が言えないという雰囲気はあったのかもしれないが、たとえば片山のもとで『労働世界』『社会主義』の編集にあたっていた西川光二郎はまったく渡米に言及していないように、無関心あるいは内心批判派という人たちがいた。だからこそ井上啓二郎の渡米批判が出るやいなや、社会主義運動主流派の機関紙『光』は○六年九月一五日（第二一号）の「雑誌瞥見」において井上の文章を引用したうえで、「青年よ、帝国主義者の口車に乗り、渡米奨励論者の言に欺かれて、米国を世界の楽土——成功の魔国なりと誤信すること勿れ。米国も亦資本家の国たるなり」と、シリウマに乗った批判をしている。また、渡米奨励の論説を『社会主義』に書き片山とともに渡米奨励の演説会までしていた松崎源吉が、後年（○七年暮れから○八年初頭ころ？）片山に対して「貴公は無暗に渡米を煽るやうだが、これは一種の罪悪ではないか。渡米して必ず成功できるといふ保証が、果して貴公につくかどうか。第一我輩自身が、米国文学士といふのであるがこの始末だ。此処にゐる赤羽が亦ソノ通り。貴公もマスター何とか云つてゐるが、現にソノ始末ではないか」と面罵したという話があるが、これも井上啓二郎と同様に、渡米という行動の有効性に対する懐疑である。もちろんこれまで述べてきたとおり片山も山根も、井上が批判するような失敗の事例を少しでも減らすことを念頭にして渡米を論じていたことはまちがいない。しかし彼らの渡米論が表面上はアメリカのバラ色の夢だけをふりまいているならば、もつと根源的な問題を見失う恐れがある。そこを突いたのが、幸徳秋水である。

まず、一九〇一（明治三四）年四月に刊行された『廿世紀之怪物帝国主義』（警醒社書店）を見よう。幸徳秋水は、イギリスやドイツの帝国主義者が植民地を必要とする第一の論拠として人口の増加とそれにもなう貧民の増加のために移民の移住先が必要だとしているのに対して、「英独の諸国が人口の増加は事実なり、貧民の増加もまた事実なり。

しかれども貧民の増加せる因由は一に人口の増加に帰すべきや、これが救済は海外移住の外遂に策なきや、これ一考すべきのところなり」と批判する。貧民の増加は「現時の経済組織と社会組織の不良なるがためのみ」である。つまり「資本家や地主や、法外の利益と土地を壟断するがためのみ、したがって富財の分配の公平を失せるがためのみ」である。だからもちろん幸徳はその「経済組織と社会組織」の改革を訴えるのである。では、もしかりに人口増加と貧民増加に対する唯一の救済策が移民であるとしても、植民地が必要なのか。実際にイギリスからの移民は、過去四〇数年間で見国の植民地に向かうよりも三倍もの人数がアメリカへ、一八九五年一年間で見てもカナダやオーストラリアに向かったのが三万三〇〇〇人ほどだが、それよりも六倍もの二〇万人もの人数がアメリカへ行っているではないか。ドイツの移民も一八九三年から九七年で全海外移住者二万人あまりのうち、一九万人以上がアメリカに行っているではないか。そのアメリカは、ヨーロッパからの多数の移民を受け入れるほど広大な国土を持ち、自ら移民を送り出す必要がないにもかかわらず、いま植民地を獲得したがつているのはなぜか。そう論じて、幸徳はこう締めくくる。「故に我は断言す、帝国主義と名くる領土拡張政策が、真に移民の必要より起れりと為す者は、これ大なる謬見なり。もしそれ移民をもつて単にその口実と為すが如きは、自ら欺き人を欺くの甚しき者、取るべからざるや論なきなり」⁽⁷⁴⁾。

移民の必要などとは帝国主義者の口実にすぎない。みことな帝国主義批判であり人口増加を理由とした移民論への批判であるが、さてこれまで見てきた日本の移民論者たちはどうだろうか。イギリスにしるドイツにしる、自国の植民地にはあまり行かずともアメリカへは大勢向かっているではないか。だとすれば、日本の社会主義者たちがもつばらアメリカを対象にした渡米論というかたちでの移民論を唱えたのは、妥当性があるように見えるのではないか。そういう疑問が当然なりたつ。これに対して、一九〇五(明治三八)年一月に渡米した幸徳秋水は翌〇六年二月二〇日、他ならぬ在米日本人を前にしたサンフランシスコの日本語日刊紙『日米』において「日本移民と米国」と題し、こう語りかけ

る。

在米の同胞諸公よ、願くば個の根本問題を一考せよ。

人、其故郷を愛せざるなし、其父母妻子兄弟姉妹を愛せざるなし。而も諸公は何ぞ其愛する故郷と、愛する父母妻子兄弟姉妹とを振り棄てて遠く四千哩の天涯地角に漂泊し居れるや。

他なし、諸公の来るは、米国の山水草木の秀麗なるが為めにあらず、米国の人情風俗の敦厚なるが為めに非ず、米国文明開化の愛好すべきが為めに非ずして、実に唯だ其衣食の得易きが為のみ、換言すれば其生活し易きが為のみ、唯だ此の如きのみ、是れ極めて明白の事実也。然れども同胞諸公よ、此極めて明白なる事實は、我等日本人に取て、頗る重大の問題たるを知らざる可らず。何となれば是れ直ちに「日本の国家は、吾人に生活の権利を保障せず」てふことを意味すれば也。

秋水のいう「根本問題」とは何か。日本における貧困の増加は、富を生産する能力がないためではなく、それに必要な資本が一部に占有されているからである。資本が生産に投下されないためではなく、生産された富の分配が不公平だからである。生活の糧を遠くアメリカに求めざるをえない多数の渡米者が生み出されるのも、こうして貧富の差を拡大させてゆく日本の「経済組織、社会組織、政治組織の不良なるの致す所」にほかならないではないか。ならば、これら「不良なる組織の改革」こそが「我等日本人に取て根本重要な問題」なのである。それを抜きにしていくら渡米して働こうが学ぼうが日本の貧困に「救治の期」がくることはなく、かえって日本の「根本重要な問題」から海外の「楽土」へと眼をそらせ、逃避することになるだけではないのか。⁵⁶⁾

『廿世紀之怪物帝国主義』から五年近くたち、対象が日本人移民に移っても、秋水の論点はみごとに一貫している。さらに彼は二月二十五日の『日米』で「在米同胞は幸福なりや」とたたみかけて問う。アメリカではたしかに金銭とパン

には不自由しない。しかしそれだけが「幸福」なのか。ここには諸君を温かく包む家庭もなければ（渡米者の多くは独身男性であった）、諸君に同情を寄せてくれる社会もない（あるのは日本人排斥の風だ）。自らを律する堅固な信念も、将来の向上をはかるだけの該博な知識も、激烈な競争の場であくせく稼ぐだけだから高尚な品格も、酒と博打に走るばかりだから清新な趣味も、なんにもないではないか、それで諸君は「幸福」だといえるのか。⁽⁷⁶⁾

なにが「幸福」ということもふくめて、いったいなにが日本の「根本重要な問題」なのか。これは幸徳秋水が在米同胞ばかりか、日本の渡米奨励論者にも（ましてそれが社会主義者ならなおさら）投げかけた問いである。しかし、このときすでに実際の渡米者だけでなく日本にいる渡米論者にとつてもたいへん苛酷な大騒動が起こりつつあった。アメリカにおける日本人移民排斥の嵐である。

四 戦争の妄想あるいは予感

アメリカの排日問題

激増するアメリカへの日本人移民とアメリカでの排日事件を気づかかって、一九〇〇（明治三三）年八月に日本政府がアメリカ向け旅券の発給を抑制しだしてから、アメリカにおける日本人移民排斥問題はさらに深まりつつあった。労働組合がつきつきと日本人移民制限を決議するというように排斥の先頭に立ちはじめ、「アジア人排斥同盟」のちに「日韓人排斥同盟」と名のる排斥組織が作られる。つまり日本人移民排斥も組織化の段階に入ったことになる。「日韓人」とあるのは韓国人移民も同時に排斥の対象になっていたからであるが、中国人排斥のときもそうだったように労働組合が排斥の先頭に立つというのはなにやら悲しい構造である。もちろん組合は日本人に仕事をとられると主張するヨーロ

ツバ系労働者のほうに味方するからであるが、まずどの労働組合も日本人が組合に加盟することを拒絶する。ところがストライキのとき非組合員である日本人はストライキに加わるすじあいはないから、雇用者側は日本人労働者を働かせる。それを労働組合側は日本人が「スト破り」をするとみなして、また新たな排斥理由にする。⁽⁷⁷⁾これは悪循環であるが、排斥の根本的問題が仕事の奪い合いであることを如実に示しているだろう。

では日常的な排斥の光景はどんなものだったのだろうか。○三年一二月に児玉星人、菊池立元と同行して渡米した富山清が翌年二月の『社会主義』（第八年第三号）に寄せている書簡によると、三人はサンフランシスコに到着したその日に町を歩いていて、道端にいる少年たちから「ジャップ・スケパー」と罵倒され、石を投げつけられ、児玉はとうとうゲンコツでなぐられてしまった。こんなことは日常茶飯事の序の口だったのであろう。⁽⁷⁸⁾

ところが、日露戦争の開戦はアメリカ太平洋沿岸地域の排日熱を一変させたといわれることが多い。これはアメリカの世論が日本側について新聞も日本の戦闘勝利を大きく報道したり、局外中立を表明したはずの連邦政府も日本側の便宜をはかったりしたからである。⁽⁷⁹⁾実際、中沢二郎も○四年一〇月の『社会主義』（第八年第二号）に寄稿した「桑港より」のなかで、「ストリートを歩いて居つても、日本人に悪戯をすることは殆んど見当らぬ」と報告している。

しかしその中沢が、○五年二月の『渡米雑誌』（第九年第二号）に寄せた「来信」では、一見好転していたかのようだった排日情勢が内部ではより深刻化していたことが記されている。○四年九月中旬にサンフランシスコ市学務局が、公立学校に通学する日本人児童生徒の数が多く白人児童生徒の就学を妨げるといふ理由で、日本人児童生徒を「東洋人学校」（中国人排斥の過程で作られた人種隔離学校）に移すという案を委員会に答申したというのである。通常知られている「サンフランシスコ日本人児童隔離問題」というのは後述するように○六年一〇月に起こるもので、この○四年のもの私が以前一度論文に記したことがあるが、⁽⁸⁰⁾それまではまったく知られていないものようである。じつはこの

日本人学童隔離が最初に画策されたのは一八九三年六月であり、その後は表面化しなかつたようだが、水面下ではくすぶりつつけていたのだらう。⁽⁸¹⁾それが排日情勢が好転したとされる日露戦争中にふたたび画策されていたのである。このときは在米日本人、サンフランシスコの日本語日刊紙『日米』『新世界』らが理解あるアメリカ人の応援を得て抗議運動を行ない、委員会が否決してことなきをえたが、もはや行政当局レベルが排斥の先頭に立つ役割を演じはじめ段階に達したことを示している。中沢は公立学校に在学する日本人児童生徒の実数一覧を掲げて、それが白人児童生徒の就学の妨げになるはずがない少数であることを示し、この一件が不当なものであることを主張している。

排日のなりをひそめ、日本びいきめいた記事を書せていた太平洋岸地域の新聞も、○五年二月下旬、サンフランシスコの有力紙『クロニクル』がふたたび排日世論をおおる社説を掲載しはじめると、つぎつぎと各紙が日本人排斥論に転じた。日露戦争がポーツマス講和条約で決着すると排日の動きはますます活発化し、一月にはアメリカ労働総同盟が中国人移民禁止法に日本人および韓国人移民禁止条項を付加せよとの請願書を探択して連邦議会に提出、翌○六年三月にはカリフォルニア州議会が上下両院ともに日本人労働者排斥を決議して、これを州知事が大統領と連邦議会に送付するという事態になったのである。⁽⁸²⁾

そして○六年四月一八日、サンフランシスコを大地震が襲った。当時太平洋岸随一の繁栄を誇っていたサンフランシスコが瞬時に壊滅する惨禍を眼前にした幸徳秋水は、『光』五月二〇日号(第二三号)に「桑港平民社無事」として、こう報告する。

大火延焼三晝夜にして止まず、桑港の目貫の場所なるマーケット・ストリートを中心として市街の大部分は全く焦土に帰せり。桑港平民社は火焰丁余の間に迫りて辛うじて免かるを得たり。

予の寓居は山の手の高台にして三層楼の前面の室なるが故に、昼夜望遠鏡を手にして此偉観壯観を賞するを得た

り。然り、真に偉觀壯觀なりき。予想ふ、是有史以來稀れに見る所の物、楚人の咸陽の炬、羅馬ネロ王の放火の光景、僅に以て比すべしと。

家を失ふて野外に宿する者二十万と号せり。全市余す所の食物は官府の爲めに徵発されて私に買ふことを得ず。市民皆な有司の救恤に依て飢を凌げり。(中略)

白人は智なりと称す。然れども其氣胆なき事は、予等東洋人の噴飯に堪ざる所也。彼等是不時の災禍に逢ふや、蒼惶狼狽措く所を知らず、叫呼し、泣涕し、昏迷するのみ。甚だしきはその財富を焼失せる失望の爲めに、若くば単に恐怖の爲に、発狂せるもの尠からず。(中略)

嗚呼、火よ、快なる哉。彼の向ふ所、神なく、富なく、何等の権力なし。壯麗なる幾多の寺院、巍巍たる市庁の大建物、多くの金庫、多くの財富、尽く火の子の雨とならざるはなし。

言ふ勿れ、之が爲めに飢凍は来たり、失業は来れり、十万の細民は具さに慘害を嘗むと。されど是れ火の罪に非ず、是れ唯だ今の社会組織の罪のみ。

このサンフランシスコの大地震と大火の目撃が幸徳秋水の思想にどういふ影響を与えたのか、いま私にそんなことを述べる余裕はない。大地震は在住日本人に大きな影響を与えた。もちろんその第一は、直接の被災である。第二は大地震直後から、被災の鬱憤を晴らすかのように頻発した襲撃、暴行や家屋商店の破壊、いやがらせなどといった排日事件である(震災で家を失った日本人が、被災しなかったヨーロッパ系の下層労働者が住む地域の家を相場よりはるかに高い家賃で家主から借りて労働者を追い出し、それが排日拡大の要因となったということも起こった⁽⁸³⁾)。しかし、第三のもののは半年近くたった一〇月一日に起こった。サンフランシスコ市当局が四日後の一五日から公立小学校に通学する日本人および韓国人の児童を「東洋人学校」に移すと発表したのである。地震後閉鎖されたまま夏季休暇の時期を過ぎ、

一〇月になってやっと学校を再開しようとしたときに、長年の懸案が浮上したのである。表向きの理由は校舎が被災して全児童を就学させることができないというものだったが（このほかに二四歳、一九歳、一六歳などという「高年齢」の日本人小学生がいるのが風紀上よくないという理由もある。これは渡米者が小学校に編入して勉学を開始することがよくあったからである）、約二万五〇〇〇人の小学生のうち日本人児童は九三人。この数では全児童を収容しきれないからというのはウソで、震災にかこつけた「学童隔離」の強行であることは明らかだった。在住日本人の反発は一挙に高まったが、市側は一日からこれを決行。連邦政府が調停に乗りだしたが、セオドア・ルーズベルト大統領の説得にも市側は応じず、ついに連邦政府は翌〇七年一月、サンフランシスコ市に対して学童隔離の撤回と各小学校長に対して対象児童の復校命令を求める訴訟を起こし、事態は裁判沙汰となった。⁽⁸⁴⁾

この間、アメリカの排日世論は沸騰し、新聞は太平洋沿岸のものばかりか大西洋岸のものまでが「日米戦争」を想定した記事を掲載しはじめた。高橋作衛は『日米之新関係』（清水書店、一九一〇年）のなかで「日米開戦の風評」として〇五年六月から〇八年四月までの新聞記事三二点を列記している（六五〜六七頁）。最初の二点が〇五年六月二四日と二七日のサンフランシスコ『クロニクル』のもので、日米開戦の論調が最初は日露講和の進行開始とともに「つぎに日本はアメリカを戦争の対象にするのではないか」というような感覚ではじまっていることを示している。その二点以外は〇六年一月以降のもので、サンフランシスコ学童問題の発生以後に日米開戦の論調が蔓延したことを表しているが、サンフランシスコ、ロサンゼルスはむろんのこと、ニューヨーク、デンバー、ミネアポリス、ヒューストン、ワシントン、ナッシュビル、ボストン、ピッツバーグ、ニューオーリンズなどとアメリカ全土に広がっているのである。

学童問題は〇七年三月に決着した。サンフランシスコ市が折れて対象児童の元の小学校への復校を命じたのである（「高年齢」小学生については、九歳以上は初学年への入学を認めず、一六歳以上は小さい入学を認めないという制限

をつけた。しかし連邦政府は市側を説得する過程で、交換条件を出さなければならなかった。それがハワイ、カナダ、メキシコからの転航の禁止である。一見不思議なように思われるかもしれないが、渡米者の多くはアメリカ向けの旅券を持たずにアメリカに上陸している場合が多かった。それがこの転航なのである。ハワイは独立国当時の取り決めに踏襲して、ハワイ向け旅券はアメリカ向けとは別扱いで、しかも比較的発給が容易である。しかし併合後は、ホノルルにいったん上陸すればあとは国内移動だから、自由にサンフランシスコに行けるのである。カナダ、メキシコの場合には経由地、たとえばサンフランシスコかシアトルに上陸してそこからバンクーバーやアカプルコに行く、あるいは逆にバンクーバーやアカプルコにいてサンフランシスコかシアトルからの船で帰国するというような理由で認められていたものであり、もちろんサンフランシスコやシアトルに着いたらそこで働くのである。これらを合計すればアメリカ向け旅券で直接上陸する数のゆうに二倍以上はあったようなのである（実態は不明）。これを禁止すればかなり日本人移民を制限できるからと、その意向を日本政府に打診したところ「好ましくはないがやむをえない」という回答だったので、学童隔離解除と同時に転航禁止が実施されたのである。⁸⁵⁾

そのころ日本側の世論はどうだったかという点、これがいたって静かであった。新聞はもちろん学童問題を報道するが、とても「日米開戦」を絶叫するどころかそれをおわすようなものですらなく、事態を静観のかまえてあった。このころは国民も新聞も日露戦争後の疲弊があり、○五年九月の講和反対の日比谷暴動につき○六年九月（しかも前年と同じ五日）には東京の電車賃値上げ反対運動がまたもや暴動になるなど社会情勢も不安で、とても「日米開戦」などという妄想を持つ余裕なかなかったのかもしれない。山根吾一の『亜米利加』はさすがにアメリカの情勢に関心は高く、排日問題を取りあげた論説や学童問題の資料を特集したりして詳しくその経過を伝えているが、日本人排斥などはカリフォルニアの世論の一部分、しかも「下層社会」のものだから、実行できるわけもない竜頭蛇尾に終わるのは明

らかだなどと、事態を過小評価することに専念している。もちろんこれは『亜米利加』の願望なのであって、そうなつてもらわないと困るからである。⁽⁸⁶⁾

いや、少なくとも一人、日米戦争を予感していた日本人がいた。それは学童問題発生のずっと前(ただし日露講和よりもあと)であり、しかも問題の核心は日本人移民ではなく日米両国の経済の衝突だという。幸徳秋水である。サンフランシスコで〇六年一月二日の『日米』に寄稿した「日米関係の将来」である。

日米記者足下、予は此地に來りて感ぜり。我日本にして、今より十年或は二十年、或は三十年、五十年の後ち、更に他の強国と戦端を開くことありとせば、其敵手たる者は、仏に非ず、獨に非ず、澳に非ず、無論英伊の二国にも非ずして、必ず現時我と尤も親善なりと称せらるる北米合衆国其者ならん。吾人及び吾人の子孫は今に於て宜しく此戦争の防止に尽力せざる可らずと。

記者足下。予此言を為さば、世人或は其唐突なるに驚き、其無稽なるを笑はん。是れ洵に唐突にして無稽なるに似たり。然れども太平洋上に境を接せる兩大国の商工貿易が、俱に益々發達隆盛なるの極は、其利害は早晚一たび衝突するの運を免かれじ。否な今日に於てすら、既に其衝突の兆候が到る處に現せるは、具眼者の窺かに看取せる所なるを疑はず。(中略)

日米両国民の衝突は、日本人の同化せざるが為めにも非ず、移民の無智貧窮なるが為めに非ずして、実に商工經濟の競争開始せらるるが為也。商工經濟の競争の持続し、増大し、激甚なるに至れば、憎悪、嫉妬、猜忌、恐怖等の悪感、交々之に次ぎ、國際關係の葛藤は頻々發生するに至らん。⁽⁸⁷⁾

すでに前年六月には『クロニクル』が日米開戦の記事を掲載していたこともある。サンフランシスコにいるからこそ幸徳秋水はこのようの予感できたのかもしれない。日本にいる論者たちには、山根吾一にでさえ、まだ遠いところで起

こつている出来事であり、切迫した現実感がなかったか、たりなかったのかもしれない。

しかし転航禁止の問題が出てきてからは、さすがに日本の論者も黙っていられなくなった。とくに移民制限が死活問題に関わる移民会社の有志はジャーナリスト、政治家たちに働きかけ一九〇七（明治四〇）年二月、「対米同志会」を結成。田川大吉郎、日向輝武、片山潜、石川半山、円城寺清、斯波貞吉、田中穂積、花井卓蔵、河野広中らが名を連ね、檄文公表や演説会で世論喚起に努め、政府議会に請願陳情を行ない、在米日本人に対して支援連携を取る方針を示した。また山根吾一も片山潜をふくめた渡米経験者を結集して「米友倶楽部」を結成し、演説会などによる世論喚起と在米日本人との連携をはかる動きを示した。しかしこれら両者の会とも、その後の動きがもう一つよくわからない。あまり活発に活動した気配がないのである。これでは日本側の動きのほうが竜頭蛇尾ではないか。⁽⁸⁸⁾要するにこの当時の日本の言論界も政界も、その中枢はアメリカにはまだあまり眼を向けていない感じがする。なにか日本から渡米する人たちもアメリカで排日に躍起になる人たちも「下層社会」の人たちだとして突き放しているような感じがする。『亜米利加』の論調でさえ少なくともアメリカに対してはその気配があったのだから、それ以外の有力紙、有力政治家となればなおさらであろう。尾崎行雄が渡米者を冷ややかに見ていた視線は、ここではより深く身体を虫ばんでいたということだろうか。

転航禁止という招かれざるオマケがついてきたものの学童問題は解決したが、あれほどサンフランシスコ市を説得し、日本人の味方であるかのように思われたルーズベルト大統領と連邦政府は、その後手のひらを返したように日本政府に移民制限を求めだした。はじめからハワイでおとなしくしているつもりのない転航志願者は、サンフランシスコの代替とばかりにバンクーバーに殺到し、カナダの世論も硬化して九月になるとその町では排日暴動が起こり、日本人街も中国人街も襲撃された。このためカナダ政府も転航禁止措置を取り、一二月には日本政府に対して日本人移民を年間四〇

○人に制限する合意を取りつけた⁽⁸⁹⁾。アメリカ連邦政府も日本政府に移民制限の合意を取りつけるべく、一月から交渉を開始した。それはオプライエン駐日大使と林董外務大臣との間の往復文書のかたちで交渉され、ついに〇八年二月一八日「日米紳士協約」が成立し、三月から実施された。その内容はこうである。

一、日本政府は再渡航者ならびにアメリカ本土在住者の両親および妻子を除くのほか、一切の労働者に対し、アメリカ本土行き旅券を発給しない。

二、右の除外例として定住農夫に対しては旅券を発給する。ただし詐欺的手段に依るものを防ぐため相当の措置を講ずる。

三、学生、商人、旅行者については旅券発給前、厳重な調査をし、渡米後労働に従事するおそれあるものには一切旅券を発給しない。これがため資力、教育につき一定の標準を設け、これを地方長官に訓達する。

四、ハワイは全然別個として除外する。ただし日本政府は当分の間、再渡航者および同島在住者の父母妻子を除くのほか、一切の労働者の渡航を禁止する⁽⁹⁰⁾。

つまり、新規労働移民の禁止である。再渡航者が除外されるのは、すでになんらかの生活拠点がないしハワイにあり、たまたま一時帰国しているだけという場合があるからだ。また、在住者の両親妻子が除外されるのは、家族をともなつた移民の場合も男性だけが単身で先に渡航し、仕事や家を見つけてから家族を呼び寄せるのが通常の方法だからだ。しかしいずれにせよ、従来のような日本の青年たちの夢を引きつけた「渡米」はこれで事実上不可能になってしまった(のち一九二四年に家族の呼び寄せもふくめて完全禁止される)。

日米未来戦記の登場

山根吾一の『亜米利加』は、日米紳士協約の成立を受けた（編集は協約の成立を見る直前だが）〇八年三月号（第一年第三号）で新しい動きを見せた。その一つはアメリカへの新規移民の禁止というこの雑誌にとつては死命を制せられたこの時期に、あとからふり返れば確実に暴挙としか見えない『日米通信』という日刊新聞の発刊予告（三月一〇日創刊）であるが、もう一つはこの三月号からある連載が開始される。この号には「移民制限と在米同胞」「石井局長の花魁的魂性（在米同胞を売れる外務省官吏）」といった記事に日本政府の無策に対する絶望的な非難、「無限なる加州の富源」「南加州の日本人（未曾有の発達）」「米国の女子教育」といった記事にアメリカへのあきらめきれない憧憬、「南米の富源」「ブラジルの風土」「南米亜爾然丁」といった記事に新たなあこがれの希求、そういった心理が入りまじって表現されているのだが、もう一つアメリカへの憎悪ともいべき心理を表現したものがあつた。生田目旭東なまのめきよくどう「太平洋上の双竜（日米戦争夢物語）」の連載開始（九月号まで七回連載）である。⁹¹初回のはしがきで生田目はこう述べている。

左の一篇は予が米国滞在中、米国人が往時我國の開国を促したる当時の誠意を失ひ、漫りに邦人の迫害排斥等をも事として益我國を冷遇するを視て、感ずる所ありて過去現在将来を叙し、以て我国民に注意を惹かんと執筆せるものにして、脱稿せしは去る三十九年十月十四日のことなり。爾來トロンクの底に在りて昨年四月予と共に帰朝したるもの、偶々亜米利加社の知る所と成りて世に出づるに至りたるものなり。（旭東）

この作品は空想小説であり、近未来の日米戦争を描くという点では「日米未来戦記」といわれるものである。生田目はまずペリー来航以来の日米の友好関係、日露戦争時のアメリカの日本に対する好意から書き起こし、アメリカのモノロー主義から帝国主義への転換、それにもなう異人種への傲慢さの激化、米西戦争によるフィリピン領有とハワイ併合、中国人排斥から日本人排斥の実情、〇五年二月下旬以後の『クロニクル』紙の論調などを記したあと、時間を一〇

年後の一九一八年に設定する。もちろんここからはフィクションで、ある鉄道会社が白人労働者三〇〇〇人を解雇して、ハワイで募集した日本人労働者三〇〇〇人の雇用をしたことが契機となって日本人排斥の動きが強まり、三万人が来集した排日集会での連邦下院議員の排日演説、キリスト教会牧師の日本人擁護の演説が描かれるが、擁護演説は無視されて排日決議がなされる。その後日本の祭日を祝う日本人の集會に爆弾が投げ込まれ、日本人街が焼打ちされ、一五〇〇人にもおよぶ日本人が虐殺されるという事件をきっかけに日米間の交渉は決裂し、日本政府は宣戦布告(七月五日)する。戦争はホノルルからマニラに向かった米軍艦隊を日本艦隊が迎撃してこれを全滅させ、日本軍はあつという間にフィリピン、ハワイ、アラスカを占領する。日本軍はアメリカ本土に進攻しなかつたが、アメリカはカナダ、南米以外への商権を封鎖され、国内では黒人兵士やインディアンが反乱するという苦境におかれたため、フランスを介して日本に講和を申し入れ、結局日本はフィリピン、ハワイ、アラスカ、太平洋諸島の割譲と賠償金三億円などを条件にして講和条約を締結(九月一五日)し、戦争を終える。

じつは「日米未来戦記」というジャンルの架空戦記物語は日本において、現実の日米開戦(一九四一年二月)にいたるまで山のように書かれ出版されることになるのだが、この生田目旭東の「太平洋上の双竜」が、現在確認できるかぎり日本人の手になる最初のものである。生田目がはしがきに記している一九〇六年一〇月一四日脱稿というのが事実ならば、ちょうど日本人学童隔離問題が発生したころであり、幸徳秋水がそうであったようにサンフランシスコのただならぬ排日の空気に刺激されて書かれたものであることはまちがいない。ただし幸徳とちがっているのは、幸徳が「予は両国人士に警告す、諸君宜しく提携して以て社会主義の弘通に力めよ、将来の戦争を防止する者唯社会主義なるのみ、社会主義は実に平和の天使也」という言葉で「日米関係の将来」を結んでいるように、日米両国の戦争を回避するという大前提で日米戦争の危機を感じていたのに対して、生田目は感じた危機をそのまま戦争に結びつけ、移民の

進路の確保という欲望が軍事力によるフィリピン、ハワイ、アラスカなどの占領と割譲という妄想に転換されて描いてしまったことにある。

日米戦争にかぎらず近未来の戦争を想定する「未来戦記」というジャンルそのものについて、稲生典太郎は「当時謂う所の国民士気の昂揚に与る読物ではあつても、文学作品と呼ぶには無味乾燥に過ぎ、軍事外交評論としても通俗に失して、ありていに言えば、かなり泥くさいものが多いので、玄人筋からはほとんど問題にされない。しかし、国民大衆には長年に亘つて親しまれ、時にはそのブームも見られたほどであるから、国民意識の中の戦争に関する感覚を形成する上には、かなり重要な役割りを果しているものと考えられる」と論じているが、最初に登場する一八八七（明治二〇）年六月の高安亀次郎『世界列国の行末』をはじめ、その後三国干渉という契機もあつて多くが「日露戦争未来記」として書かれ、現実の日露開戦に突き進んで行く。そのなかではじめて「日米戦争」を想定したものが出てくるのが、『芸倶楽部』一八九七（明治三〇）年九月臨時増刊号（第三卷第一三号）の『蓋世偉勲海戦未来の夢』（これ自体はアメリカ人の手になる英仏戦争未来記である）に付録として収録された米国海軍大尉ハミルトン作・米国文学士岡田竹澳訳「日米開戦未来記」である。

そのまえがきによれば、時期は不明だが原文はサンフランシスコの新聞『エキザミナー』に掲載されたもので（ただし未確認）、アメリカ人が書いたものだからアメリカが勝つ内容になっているのは不思議ではないとわざわざ断わっているが、作品の冒頭で日本がハワイを占領し、その理由が日本人移民の損害の賠償を求めるといふものであるから、これが現実¹に起こった事件をふまえているとすれば、先述した九七年二月から起きたハワイでの日本人移民上陸拒絶問題をさしているだろう。つまり原文が書かれたのは同年二月以降ということになる。まだハワイはアメリカに併合されていないが、日本がハワイでの損害の賠償を求めてアメリカに乗り込んでくることに見られるように、著者の意識のなか

ではすでにハワイはアメリカ領なのだろう。著者は日米両艦隊の攻撃力比較やアメリカの海岸防禦の不備などを論じ、海軍大尉らしい軍事的関心を見せているが（だから「未来戦記」というのは戦力比較をしたうえで戦争のシミュレーションを行なうという要素を持つ場合が多い）、サンフランシスコ沖に現れた日本艦隊はサンフランシスコ市への砲撃を予告し、米軍艦隊と衝突するが、いったん退去してじつは秘かに脇にまわって上陸作戦を決行、陸路をとってサンフランシスコを占領する（このあたり海軍大尉の著者にあるまじき幼稚な戦争ごっこに見える）。しかしアメリカは義勇兵を募集して兵力を増強し、ホーン岬を回ってきた米軍艦隊の援軍がサンフランシスコに向かうと見せかけてハワイを奪還、そのまま日本に向かい上陸作戦を開始。サンフランシスコから引き返してきた日本艦隊はハワイという補給基地を失ったおかげで疲れきっていて、米軍艦隊に返り討ちにされて壊滅、というあらすじである。

「日米未来戦記」としてはアメリカにおいてこのハミルトンの一作が異様に早く書かれていたことになるが、ハワイには王制廃止の政変直後（九三年二月）に日本海軍が巡洋艦「筑波」（東郷平八郎艦長）を派遣して在住日本人保護の名のもと臨時政府の牽制にあたっていたこともあり、ハワイ併合に向けて日本を強く意識するする動きが米軍の内部にはあったと想像することができる。

その後現実の日露開戦まで日本で刊行される「未来戦記」はほぼ対ロシア一辺倒になるが、日露戦後、そしてサンフランシスコ学童問題後の一九〇七（明治四〇）年になるとはつきり「日米未来戦記」の動きが出てくる。『報知新聞』が二月二三日から連載する『未来の戦争——独逸人の見たる将来の日本』であり、副題にあるように原作は氏名不詳だがドイツ人が書いたものである。この連載は第四回（二月二六日）から「独逸人の著はせる『未来の戦』日米戦争」、第一九回（三月一六日）から「独逸人の著はせる『未来の戦』日英戦争」、第三一回（三月二九日）からは「独逸人の著はせる『未来の戦』世界戦争」と題されて五月二六日の第六六回まで続く。冒頭から日本と中国が秘密裏に反白人同

盟を結んだうえで日本がアメリカに宣戦布告、フィリピンからハワイ、フィジー、サモアに進撃し、太平洋の覇権を握ると今度はイギリスが太平洋の実権を奪おうと日本に宣戦布告。日本はマレーからインドへと進撃する。「世界戦争」の部分では英米戦争、英仏戦争、独英戦争ともう真剣に読まなければ（しかし真剣に読むのはバカバカしい）何がなんだかわけがわからなくなり、結局ドイツを中心としたヨーロッパ同盟が日本とアメリカに宣戦布告するも日本艦隊に壊滅させられ、最後は日本が世界平和の女神となるという内容である。この連載はそのまま同年一〇月に千葉秀浦・田中花浪訳『黄禍白禍未来之大戦』（服部書店）として刊行されている。ドイツで書かれたものであるから、背景にあるのは黄禍論あるいは白人至上主義的なものであって、日本人移民排斥問題が戦争の理由として描かれるわけではないが、こういうものを新聞連載してうれしがっているようでは、日本側でも日米戦争を想定する空気が徐々に高まっていることをうかがわせる。そこに翌〇八年、生田目旭東の「太平洋上の双竜」が日本人の手による最初の「日米未来戦記」として登場するのである。

実際すでに、片山潜の『社会新聞』までもが〇八年一月二二日（第三号）に「日米戦争来らん」を掲載し、「日米戦争は、いまや実に必死の形勢を成せりと云ふも誤りあらざるべし」と論じていた。もちろんそれは日米双方の労働者が戦争回避の努力をせよという主張をふくむものであったが、しかし片山潜といひ山根吾一といひ、渡米経験があり渡米奨励の論陣を張って、アメリカへの憧憬も深いからこそ、サンフランシスコにいた幸徳秋水や生田目旭東ほどではないにしろ、やっと日本の言論界一般よりもより敏感に日米戦争の危機に反応しているといえるだろう。山根の『亜米利加』は「太平洋上の双竜」の連載が終わったあとの一〇月号（第二二年第一〇号）にドイツで書かれた「日米未来戦記」であるパラベラム『ばんざい！』（原著一九〇八年。邦訳は嘗胆生訳、朝香屋書店、一九二四年刊）のあらずじを「日本勝つか米国勝つか（独逸人の架空小説）」と題して掲載している（『パラベラム』を書名だと勘違いしているが）。開

戦理由ははっきり書かれていないが、開戦するや日本が連戦連勝で、あつという間にマニラからサンフランシスコを占領し、海戦にも大勝して講和条件を突きつけるが、そのあまりに苛酷な内容に米軍の猛奮起による反撃をまねいて日本が逆転大敗するという内容である。○八年の何月にドイツで出版されたものかわからないが、同年一〇月にはあらずじを紹介しているわけである。アメリカでの英訳出版は○九年だから、『亜米利加』のあらずじ掲載はドイツ語の原書から行なわれたものであることは確実であり、山根たちがこの手の情報にいかに敏感になっていったかがわかるだろう。⁽⁹⁵⁾

翌○九年になるとアメリカで問題作、ホーマー・リー『無知の勇氣』が出版される。食傷気味なもので内容も詳しく紹介しないが、太平洋の海権をめぐる日米の対立、アメリカにおける日本人排斥問題、日米両国の海軍力・陸軍力の比較などをふまえて、日米戦争の開始から日本がハワイ、フィリピン、アラスカからワシントン、オレゴン、カリフォルニアと太平洋岸を占領して勝利するまでが描かれる。要は油断せずに戦争に備えないとこんなことになるぞという警鐘を鳴らすもののだが、私が問題作といたしたのはアメリカでアメリカ人が書いたのに日本が勝つという内容だからではない。いや、日本が勝つという内容だからこそよけいに日本側で注目されたのだろう。翌一〇(明治四三)年に海軍省が英文のまま『盲蛇』と題して、一一年二月には陸軍省が望月小太郎訳『日米必戦論』と題して、どちらも極秘内部資料として配布するのである。⁽⁹⁶⁾そして同年一〇月、池亨吉訳『日米戦争』(博文館)として一般向けにも出版される。それにしても陸海両軍が内部資料としてこれを配布したということはいったいなにを意味するのだろうか。日本の軍部が将来の交戦国としてアメリカを大きく意識しはじめたことはまちがいない。すでに陸海軍は○七年四月、ロシアに次いでアメリカを仮想敵国の第二位に想定した「帝国国防方針・国防所要兵力・用兵綱領」を決定していたのである。⁽⁹⁷⁾

その後、日本人の作になる「日米未来戦記」としては、一九二二年に押川春浪『武俠小説日米の決闘』(『武俠世界』五月号。のち押川春浪『武俠小説怪風一陣』、本郷書院、一九一四年六月所収。この小説は架空戦記ではなく、メキシ

コを旅行中の日本人の海軍大尉が悪辣なアメリカ人の高利貸しと決闘するという妙な話なのだが、押川が冒頭で「日米開戦の蜚語怪説もある今日、此様な題目を掲げると、神經過敏なる一部の人々から睨まれるかも知れぬ」と述べていて、逆に彼が「日米開戦」を確実に意識して書いていることがわかる。⁹⁸ただし、さすがに当代随一の冒険小説作家である。読んでいてこれまでのどの「未来戦記」よりもはるかにおもしろく、思わず真剣に読んでしまった、一三年に国民軍事協会『日米開戦夢物語』（中央書院）、一四年に水野広徳（一海軍中佐）『次の一戦』（金尾文淵堂）、大戸竜川『日米若し開戦せば』（日米新聞社）、二〇年に樋口麗陽『日米戦争未来記』（大明堂書店）、佐藤鋼次郎『日米若し戦はば』（目黒分店）などというように、挙げていけば切りがないからもうやめておくれ、きわめて多数のものが書かれ、現実の日米開戦にまでいたるのである。⁹⁹

だとすれば、すでにアメリカとドイツで書かれ日本で翻訳が出されていたとはいうものの、生田目旭東の「太平洋上の双竜」とそれを掲載した山根吾一の『亜米利加』は、日本人自身の側としては最初に「日米戦争」というパンドラの箱をあけ、四一年一月八日に向かう、いや、四五年八月一五日に向かう第一歩を踏みだしてしまった、ということになるのだろうか。

むすび

副題に「明治日本の不安と欲望」としたかぎりには、もう明治が終わるこのあたりで筆をおくことにする。私にはここから先を語る気力も能力もないし、資料も持ちあわせていない。しかし、明治の末年で、「日米未来戦記」が登場したところで、それから先の材料はすべてそろったといつていいだろう。ここにいたればその筋書はだれの眼にも明らかで

ある。「日露未来戦記」が現実の日露戦争につながっていったように、たとえ多少の紆余曲折があろうと「日米未来戦記」も現実の日米戦争につながって行くのである。

明治の末に五〇〇〇万を超えた日本の人口（植民地を除く）は、大正末期に六〇〇〇万、昭和一〇年代初期に七〇〇〇万に達した（第二次大戦時に「進め一億、火の玉だ」や「一億玉砕」というスローガンが掲げられたが、その「一億」は朝鮮・台湾など植民地をふくむ）。日本人移民は軍事力とは無関係にも南米へ、あるいは軍事力のあとを追うように南洋諸島へ、満州へと向かったが、それは人口増加に対してなんの解決策にもならなかった。結局軍事力のみが暴走し、満州事変から日中戦争へと、「北進」方向の進展によって日本は泥沼の戦争に突き進む。そして四二年二月八日、日本はふたたび「南進」の夢を描くかのようにマレーへ、ハワイへと進攻をはじめた。

それらは、もちろんその時どきでながしに正当そうな理由がつけられたり、もっともらしい言いわけがあったのだろう。しかし、根源的には人口増加の圧力があつたのではないだろうか。たとえ口には出されなくても、すべての日本の行動の背景に「人口が増えるのだから仕方がないじゃないか」というような居直りが見え隠れするような気がする。それを免罪符にしているような気がする。移民論が、そして「日米未来戦記」がまるで自己充足的予言であるかのように日本を呪縛し、日本人の意識を麻痺させ、「北進」へ「南進」へ、そして「日米戦争」へ突き進んで行かせたかのように見えてしまう。

こうして四五年八月一五日を迎えたとき、南洋諸島は玉砕の島々になり、満州は引揚時に大混乱し、朝鮮は棄てられていまなお引きつづく戦乱と分断の地にされた。沖縄は壊滅し、広島と長崎は消え去り、東京も大阪も焼かれた。人口増加によってより大きな国土を求めて狂奔した結果は、多くの国土を失うことになったのである。

では、戦後はどうであったか。敗戦時に戦禍でやや減少して約七二〇〇万（それでもいっただう減少したのかとい

う程度の減り方でしかなかった)だった人口は、二三年後の一九六七(昭和四二)年、まさに「明治一〇〇年」に一億人を超える。徳富蘇峰は一八九四年の時点で八三年後に一億を超えると推計していたが、それよりも一〇年早く達成された。つまり明治の論者たちのだれの予想よりも早く、現実の人口増加は進んだのである。

もちろん戦後も日本は移民を送り出す側の国であった。南米への移民は一九七〇年代まで続いた。しかし、すでに明治期のように世界のあちこちに移民の行く先を求めたり、戦前期のように軍事力を背景に「国策」として移民を送り出すこともできなかった。にもかかわらず、人口増加の圧力は、戦前期にも増して強くなったのである。

その圧力をいっただいどう処理したのか。移民も軍事的膨張も不可能となれば、残るは経済発展と産業拡大ではないか。戦後復興から高度成長へ、それはおりから第二次産業革命ともいべきエレクトロニクス革命とあいまって、絶妙な人口増加の圧力の受け皿を作りだし、日本を「経済大国」に押しあげていったのではないか。こうして戦後も引きつづき、人口増加の圧力は日本を根源的などころで支えつづけていたのではないか。

そうだとするならば、現在の日本の状況はもはや明らかだろう。人口増加の圧力は消失したのである。明治期以来戦後まで日本を根源的などころで支えていた人口増加はなくなり、あるのはこれからの人口減少という現実だけである。日本はいったいいつごろからこのことを意識しはじめたのだろうか。もちろん統計上は一九九〇年代も人口増加はつづいていたが、実際に人口が減少しはじめる最近のことではないはずだ。統計から考えれば人口が減少に転じることは早くに予想がつくはずだからであるが、実感としてそれが意識されるのはいつごろなのだろうか。現実に幼児や小学生の数が減少しはじめる、つまり「少子化」が見た目の現象として現れはじめる八〇年代末期から九〇年代当初、「バブル」から「バブル崩壊」のころではないだろうか。ひょっとしたら「バブル」というのは、線香花火が最後の瞬間にパッと明るく光るような、人口増加の圧力が消える瞬間だったのではないだろうか。その圧力が消え去ったあとは「失われた

二〇年」だとかといわれている始末である。それは日本を根源的に支えていた圧力が消滅してしまったからだろう。

そうならば、これからどうすべきかはつきりしている。私はもう一度日本に人口増加を、などと思っているわけではない。それは数値上だけの問題ならたとえ可能だとしても（少子化に歯止めをかけ、多数の移民を受け入れるのなら、可能かもしれない）、いったん覚醒してしまった以上、ふたたびそれを圧力にすることは不可能だろう。しかも食糧問題もエネルギー問題もともなつて地球全体の人口が爆発状態にある以上、日本一国が人口増加に夢を託すことはなおさら不可能だろう。それに代わるなにかを見つけ、それを日本を根源的に支える圧力にしなければならぬ。それがなにかということは、まったくわからない。しかし見つからなければ、明治の日本が心配していたとおりに「国運衰退」で滅びるだけかもしれない。今後何十年も何百年も、いや永遠に、「失われた」ままになるかもしれない。

- (1) 福沢諭吉（無署名）「人口の繁殖」、『時事新報』一八九六年一月三日。ただし『福沢諭吉選集』第七卷、岩波書店、一九八一年、二七五―二七七頁より引用した。なお以下資料の引用にあつては原則として漢字は新字体に変更、かなづかいは原文のまま、ただしカタカナまじり文はひらがなまじり文に改め、合成がなや踊り字も改め、濁点を補入、句読点は読みやすいように適宜補充改変、明かな誤字脱字は訂正した。
- (2) 亀頭宏『人口から読む日本の歴史』、講談社（講談社学術文庫）、二〇〇〇年、八三―八四頁。なお以下同書から引用する数値は、同書に詳細な数値が掲載されている場合も、概数として記載する。
- (3) 同上、一六―一七頁。ただし以下の徳川幕府による人口統計の数値は、人口の一割を占める武士・公家・被差別民を除いたいわゆる「農工商」のみの庶民人口であり、またさらに庶民人口のうちの一割ほどが遺漏されているため、それらを補正した数値が使われている（同、八五頁）。
- (4) 同上、八六頁。
- (5) 同上、一〇五―一〇九頁。
- (6) 同上、二一七頁。
- (7) 日本弘道会編『増補改訂西村茂樹全集』第一卷、思文閣出版、四四―四六頁。
- (8) 植松考昭「人口問題（一）」（『東洋経済新報』第四九五号、一九〇九年八月二五日）所載の統計年鑑にもとづく統計表による。ちなみに一八八六

年まで二月一日付、その次は同年二月三日付で調査され、以後は毎年二月三日付となる。

(9) なお、以下新聞雑誌史料からの引用の場合は原則として、新聞は発行年月日、雑誌は号数と発行年月日(月刊の場合は発行年月)のみをならのかたちで本文中に記して、頁数は省略する。単行本史料からの引用も、原本からの場合は頁数も含めて本文中に記載するようにする。

(10) 森久男「解説」、鈴木経勲『南洋探検実記』、平凡社(東洋文庫)、一九八〇年、二五八頁および二八〇頁。

(11) 世良太一編『杉先生講演集』、横山雅男刊、一九〇二年、一五三―一五五頁。吉田秀夫『日本人口論の史的研究』、河出書房、一九四四年、一六一―一六二頁参照。

(12) 主要なものを挙げておくと、「移住の気風」(三月二日)、「移住は我国に利益ありて弊害なし」(四月二三日)、「移住論」(五月三日・六月一日・二日)。

(13) 矢野徹『南進』の系譜——日本の南洋史観」、千倉書房、二〇〇九年、一八四頁。なお同書は『南進』の系譜(中公新書、一九七五年)と『日本の南洋史観』(同、一九七九年)が合本再刊されたものであり、一六三頁以下は『日本の南洋史観』の部分である。

(14) 宮崎品行氏の教示による。

(15) 巻頭論文であり無署名だが、これが徳富蘇峰のものであることは『明治文学全集34 徳富蘇峰集』(筑摩書房、一九七四年)所収の和田守編「年譜」による。

(16) これも無署名だが蘇峰のものであることは、同上「年譜」による。

(17) 吉田秀夫、前掲書、一六七―一六九頁参照。

(18) 同上、一七一―一七二頁参照。

(19) 植松考昭、前掲論文。

(20) 矢野暢、前掲書、一七四頁。

(21) 岡林伸夫「彷徨の竹内余所次郎」、『初期社会主義研究』第一六号、一三九―一四〇頁参照。

(22) 『東京地学協会報告』第二年第八号、一九九一年一月、および第二年第一〇号、一九九一年三月。

(23) 矢野暢、前掲書、一九〇―一九二頁。

(24) 同上、一八〇―一八一頁。

(25) 吉田秀夫、前掲書、一七三―一七六頁、および一八六―一八九頁。

- (26) 同上、四五二～四五三頁、および四五九～四六〇頁。
- (27) 若山儀一「大隈外相に与へて南米拓殖を論ずるの書(仮題)」、『若山儀一全集』上巻、東洋経済新報社、一九四〇年、三四二～三四五頁。なお黒田謙一『日本植民思想史』、弘文堂、一九四三年、二二八～二二九頁参照。
- (28) 上野久「メキシコ榎本移民——榎本武揚の理想と現実」、中央公論社(中公新書)、一九九四年、二五～二七頁。
- (29) 同上、四八～六四頁。
- (30) 前掲『明治文学全集34 徳富蘇峰集』、二四六～二四八頁。
- (31) 同上、二四九頁。
- (32) 同上、二四九頁。
- (33) 同上、二五五～二五七頁。
- (34) 同上、二五七～二五八頁。
- (35) 同上、三〇～三二頁。
- (36) 前掲『福沢論吉選集』第七巻、二七五～二七六頁。なお同書は「人口の繁殖」以下七編の社説を「移民論」の表題のもとに一連の著作としてまとめている。
- (37) 同上、二七八～二七九頁。
- (38) 立川健治「福沢論吉の渡米奨励論——福沢の交通、アメリカの原光景を中心として」、『富山大学教養部紀要(人文社会科学篇)』第二三巻第二号、一九八九年、一九～二頁。この論文と、同じく立川健治「明治前半期の渡米熱(一)——『時事新報』(『富山大学教養部紀要(人文社会科学篇)』第二三巻第二号、一九九〇年)は『民情一新』の「交通」論を媒介にした延長に福沢と『時事新報』の渡米奨励論があるという観点から、それを詳細に分析検討したものである。
- (39) 『福沢論吉選集』第四巻、岩波書店、一九八一年、二五七～二五九頁。
- (40) 立川健治、前掲「明治前半期の渡米熱(一)」、三～五頁。
- (41) 同上、四頁。
- (42) 蔵原の渡米については、岡林伸夫「ボストンの蔵原惟郭」、『同志社談叢』第二九号、二〇〇九年三月、参照。そこでは内村と片山についても言及している。

- (43) 片山潜『渡米案内』、労働新聞社、一九〇一年、五七頁。
- (44) 片山潜『自伝』、改造社、一九三二年、一五四～一五五頁。
- (45) その詳細は、立川健治、前掲『明治前半期の渡米熟(一)』参照。一八八八年にいたるまでの『時事新報』上のすべての渡米関係の記事がリストアップされている。
- (46) 世良太一編、前掲書、一五〇頁。吉田秀夫、前掲書、一三三～三四頁参照。
- (47) 阪田安雄『脱亜の志士と閉ざされた白智人の楽園——民権派書生と米国に於ける黄色人種排斥』、田村紀雄・白水繁彦『米国初期の日本語新聞』、勁草書房、一九八六年、八三頁参照。
- (48) 『尾崎翠全集』第三卷、公論社、一九五五年、三四三～三四六頁。
- (49) 片山潜、前掲『自伝』、一七七～一七八頁、および一九二～一九三頁。
- (50) 長沢別天『ヤンキー』(敬業社、一九九三年)、『明治文学全集』37 政教社文学集、筑摩書房、一九八〇年、三二七頁。
- (51) 岡林仲夫、前掲『ボストンの蔵原惟郭』。
- (52) 方舟(山根吾一)『大石徳太郎氏の成功』、『社会主義』第七年第三号、一九〇三年一〇月一八日。
- (53) 前掲『尾崎翠全集』第三卷、三四七頁。
- (54) 森久男、前掲論文、二五九頁。
- (55) 同上、二六〇頁。
- (56) 猿谷要『ハワイ王朝最後の女王』、文芸春秋社(文春新書)、二〇〇三年。
- (57) 児玉正昭『日本人移民ハワイ上陸拒絶事件』、不二出版、二〇〇一年、六一～六五頁、および七〇頁。
- (58) 鈴木讓二『日本人出稼ぎ移民』、平凡社、一九九二年、六九頁。
- (59) 蕉島耕夫『布哇酒店王官保平君の奮闘』、『亜米利加』第一一年第二号、一九〇七年二月。
- (60) ロバート・G・リー(貴堂嘉之訳)『オリエンタルズ——大衆文化のなかのアジア系アメリカ人』、岩波書店、二〇〇七年、八七～九四頁。
- (61) 岡林仲夫『移民——近代日本の経験と現在』、出原政雄編『歴史・思想からみた現代政治、法律文化社、二〇〇八年、六六～六八頁参照。
- (62) 若槻泰雄『排日の歴史——アメリカにおける日本人移民』、中公論社(中公新書)、一九七二年、一一～一三頁。
- (63) 鈴木讓二、前掲書、八一～八二頁。

- (64) 若槻泰雄、前掲書、五二～五三頁。
- (65) 岡林伸夫、前掲「彷徨の竹内余所次郎」、一四五～一四六頁参照。
- (66) 鈴木讓二、前掲書、四六～四八頁、および三三～三九頁。
- (67) 片山潜、前掲『自伝』、二九八～三〇〇頁。
- (68) 岡林伸夫『ある明治社会主義者の肖像——山根吾一覚書』、不二出版、二〇〇〇年、三八～四〇頁。
- (69) 同上、四一～四二頁に掲載した要約を転載した。
- (70) 同上、八九～九〇頁。
- (71) 中沢二郎の渡米については、岡林伸夫「サンフランシスコの中沢二郎」、『初期社会主義研究』第一八号、二〇〇五年。菊池立元と児玉星人の渡米にも言及している。
- (72) 岡林伸夫、前掲書、一四〇～一五一頁、一五五～一六九頁。
- (73) 吉川守園『荆逆星霜史』(原著一九三六年)、『資料日本社会運動思想史』第六卷、青木書店、一九六八年、四四五～四四六頁。
- (74) 幸徳秋水『帝国主義』(山泉進校注)、岩波書店(山岩波文庫)、二〇〇四年、九六～一〇二頁。なお、秋水はイギリス、ドイツの移民数を一の位まで詳細に挙げているが、本文では概数の表記にとどめた。
- (75) 幸徳秋水『平民主義』(隆文館、一九〇七年)、山泉進編『幸徳秋水——平民社百年コレクション第一巻』、論創社、二〇〇二年、一〇五～一〇九頁。岡林伸夫、前掲書、二二一～二二三頁参照。
- (76) 同上、一〇九～一一三頁。
- (77) 若槻泰雄、前掲書、五六～五七頁。
- (78) 岡林伸夫、前掲「サンフランシスコの中沢二郎」、二二六頁。
- (79) 若槻泰雄、前掲書、五七頁。
- (80) 岡林伸夫、前掲「サンフランシスコの中沢二郎」、二三八～二九九頁。
- (81) 賀川真理『サンフランシスコにおける日本人学童隔離問題』、論創社、一九九九年、一一三～一二七頁。
- (82) 岡林伸夫、前掲「サンフランシスコの中沢二郎」、二四〇～二四二頁。
- (83) 「在米日本人の成功(腕一本腔一本)」、『渡米雑誌』第一〇年第二二号、一九〇六年二月。

- (84) 若槻泰雄、前掲書、六三～六四頁、および七〇～七一頁。
- (85) 同上、七二～七三頁。
- (86) 岡林伸夫、前掲書、二八三～二八四頁。
- (87) 幸徳秋水、前掲『平民主義』、九七～一〇二頁。
- (88) 岡林伸夫、前掲書、二八四～二八八頁。
- (89) 同上、二八九頁。若槻泰雄、前掲書、八四頁。
- (90) 若槻泰雄、前掲書、八一頁。
- (91) 岡林伸夫、前掲書、二九七～三〇二頁。
- (92) 稻生典太郎「明治以降における『戦争未来記』の流行とその消長——常に外圧危機感を増幅しつづける文獻の小書誌」、『国学院大学紀要』第七号、一九六九年二月、二二九頁。この論文は副題にあるように小説・評論を問わず未来の戦争を想定した日本における出版物の文獻リストであり、以下の本稿においてもおおいに参照したが、生田日旭東のものは把握されていない。また、日米未来戦記を網羅的に把握して書かれた猪瀬直樹『黒船の世紀——ミカドの国の未来戦記』(小学館、一九九三年)の「参考文献」にも生田目ものものは記載されていない。
- (93) 猿谷要、前掲書、一八五～一八六頁。
- (94) 岡林伸夫、前掲書、三三〇頁。
- (95) 同上、三〇七～三〇八頁。横田順彌「明治『空想小説』コレクション」、PHP研究所、一九九五年、一三三～一三四頁。
- (96) 横田順彌「明治ワンドナー科学館」、ジャストシステム、一九九七年、五一～五三頁。
- (97) 江口圭一「一九一〇—三〇年代の日本——アジア支配への途」、『岩波講座日本通史18 近代3』、岩波書店、一九九四年、一三～一四頁。
- (98) そのせいか、稻生典太郎、前掲論文、二二六頁においても、猪瀬直樹、前掲書、五一～八頁においても、日米未来戦記として記載されている。
- (99) 詳細は、稻生典太郎、前掲論文、および猪瀬直樹、前掲書の「参考文献」を参照。前者は評論、翻訳あるいは日米戦争以外の想定のものも多数含まれているので、「日米未来戦記」としての数を勘定しにくい。後者に「日米未来戦記」として列挙されているものは、翻訳をふくめて九二点におよぶ。